空襲・疎開
そして終戦

恒久平和の旗の下に

H・Tさん　77歳
摂津市正雀本町

昭和九年春のひと日、大阪第四師団司令部は妙に華やぎ、ざわついていた。それは、この日初めて、建国間もない満州国の青年将校達と日本の娘等の集団見合が開かれたためだった。

亡父は官位とは別に私の妹もその会に連れていった。十六才の妹は何の会合ともわからぬまま、その頃男装の麗人とうたわれた川島芳子の美男振りに圧倒され、余興に新満州国国歌を唄ったことのみ印象に残して帰宅した。無論いっさい極秘裡だった。

今にして想えば、その頃からすでに太平洋戦争は台頭の兆しがあったらしい。同七年、満州国建国以来、柳條溝・蘆溝橋などのいまわしい事件に引き続き国際連盟脱退の後、米・英両国のABCラインと称する経済封鎖に日本は喉元をしめられ、わが非の部分を棚上げし戦争に突入した。不拡大方針の隠れ簑により中国全土の大半に戦域は拡大した。

同十六年十二月八日のハワイ真珠湾奇襲攻撃ですでに後へは引けなくなった。思い返せば五年前十一年二月二十六日早朝、帝都は一部軍人の反乱のため、大不祥事が起こった。同日、亡父の従弟H・K君は勇躍入営したのだった。めずらしく大阪の空は雪が舞い万歳の声も凍えた。彼は武漢三鎮攻略にも参加し、終に二十年八月終戦を待たず高千穂落下傘部隊の隊長としてレイテの空に散った。

後日、主人は「月に酌み月に唄ひて征きしまゝ」「十三夜待たで比島の空に散る」の二句を惜別の偲び草とした。昭和十五年は二千六百年記念祝賀に明けた。しかし初秋の頃のノモンハン事件はウヤムヤにおわり、日本軍の敗色は被うべくもなかった。歳末には玉子の品薄が、静かながら、食糧難の浸透を暗示しているようであった。

「キンシ騰って拾五銭……」と記念奉祝歌のパロデーに唄われた如く、煙草を筆頭に食料、日用品等々が高騰して不足勝ちが普通となり、需要と供給のバランスが保てなくなった。翌々十七年、三女は国民学校と呼び名の変わった味舌小の新一年生となり、梅干弁当に空腹を辛抱し、大根引き抜きの唄というのを教わったと自慢気に話すので歌わすと「この一線命の限り引き抜かん」とのこと。よく吟味すれば「この一戦、命の限り生き抜かん」だったので大笑いした。

中国戦線は大本営発表によると連戦連勝で、梅香る頃にはシンガポールも陥落し「昭南」と命名された。しかしこの辺で戦史の塗り替えが現われ始め、

ソロモン諸島などでは日増しに苦戦の色が濃くなってきた。かつて歌会初めの「海」という御題の年に、「ソロモンに続くこの海凪ぎわたる鷗となりて還れ弟」という歌が入選した。弟を偲び、海辺に待つ姉の心情を余す所なく詠み得て絶妙だった。

さて十八年四月十八日の正午前、急に「火事！」と呼ぶ声がした。表へ出ると二軒西南隣りの洋服仕立業の家から防空訓練で馴れてはいるが、本物の白煙が噴きだしている。聞けばアイロンを差し込んだまま配給物を取りに行っての留守中出火だった。胆を冷したが大事に至らず消し止め得た。

その頃配給制が徹底して食品、衣料品、鍋釜の類から文房具まで国民の生活は配給制に縛られ、それらを求めるための行列は大変な時間の空費であった。同年五月末のある日、私達は大いなる悲報を信じねばならなかった。彼の山本五十六大将が南方の空に散華されたと報ぜられたから。「海行かば」の調べがこの時ほど胸に迫ったことはなかった。国葬の後もなぜか戦果は陸海空とも低調で、弔い合戦の合言葉は空振りのように思えた。それでも勝利を願いつつ迎えた翌々二十年の正月は、配給の鮭ひと切れと清酒一合と闇買いの鰯で、灯火管制下の淋しいながら感謝の新春を祝った。姉は寒さしのぎに父の古いズボン下を穿き、靴まで男物のお古を利用したチャップリンのような姿に私は顔をそむけて涙した。姉弟妹四人が戦勝祈願に天満宮へ参拝に行った留守に、主人といよいよ防空壕を作る具体的な話合いをした。

私が四日に山田へ青竹を貰いに親戚へ行き、五日に茨木の北部へ、寒天造りが中止になっているのでその簀をわけて頂きに行く事に一決した。先方への話し合いは主人がつけて、私は供の人と二人連れで寒風もものかわ勝つ為にはとの決心固く、大八車の後押しをして簀二十枚を無事運び帰宅したのは、夜中の十二時近かった。竹は山田の親戚より届けて下さっていた。

壕は掘手一人を雇って一日で完成した。簀を敷き天井も簀で、青竹の柱は清楚で、思ったより広く、早速家財道具を運び入れた。旬日を経ずして大阪の空心町が大空襲を受けたことを知った。憶い起こせば運命の三月十四日、大阪地方の大爆撃でこの壕は表通りで地の利を得、薫英の女学生、通行人等随分大勢の方のお役に立った。その夜はこの世の最後のようにおもえて、隣りのお婆さんがとっておきの白砂糖を薬包紙ひと匙ずつ分けて下さった。幸い夜明近く、都島方面の異様なまでの真っ赤な空を眺めつつ、我々の無事安泰を確かめ合った時は、掌を握り合って神仏に感謝した。

晩春、初夏と過ぎ、魔の八月となり、子供達の学校は勤労奉仕で夏休みを返上、毎日空腹を抱え高槻の湯浅工場やその他の工場へ通った。暑い烈日も肉弾戦の勇士を偲び苦にならぬ折柄、六日午前八時過ぎた広島に新爆弾が投下された事実を知った。我々経験の焼夷爆弾などおよばぬ恐ろしい威力の爆弾なることも聞いた。続いて九日に長崎もその洗礼を受けたとわかり、同時にそれが原子爆弾であったこと、その放射能汚染の恐ろしさは前代未聞であることも知り得た。両市の惨状も現地報告で追々鮮明となり、硫黄島・沖縄も血涙を呑んでの玉砕！遂に本土決戦の覚悟をきめた八月十五日正午、玉音放送を拝聴するようとの回覧あり、破損のひどいラジオを叩きつつ体中を耳にして聞き取ったときは悲しかった。しかしその夜からの明るい灯下での団欒（だんらん）を思うとホッとしたことも確かであった。

あの日から四十年、陛下の終戦の詔勅は忘れることはできぬ。戦後種々の苦難に行く手を遮ぎられつつも、総ての敗戦処理を成しとげ、高度成長期を経て世界の経済国、平和実践国を誇り得るよう務めつつある平和裡の現代となれたが、軽兆浮薄が拝金主義と共に国民精神の底流をなすことが嘆かわしい。

かつて厚木飛行場に降り立ったマッカーサー元帥は、食糧の即時配給等の善政をしいた反面、３Ｓ政策により日本人の弱体化を図って見事成功した。いま目覚めねば遅い。目前に二十一世紀が迫っている。全世界人類は飢餓を助け合い、皆、平等に恒久平和の旗の下に集うことを誓おう。

私の戦争体験
―平和を祈って―

A・Yさん　当時64歳
摂津市千里丘

私が千里丘の駅へ始めて降り立ったのは、戦争もますます厳しく、末期に近い、昭和二十年二月の寒い朝でした。それまでは、大阪市内に住んでいたのですが、疎開で、一才半の長男を背に、親子共に綿入れの防空頭巾を被り、私はモンペに下駄履きでした。そんな姿を、今の若い方にはとても想像できないと思います。

それから二ケ月後の四月十四日、私の夫は三回目の召集令状を受け取ったのです。そして翌十五日には、大阪中部二二部隊に入隊、五日後には戦地へと出発したのです。

「〇〇日大阪駅より出発らしい」との事を耳にした私は、その日朝早くから駅前に立ち、長時間待ってようやく隊列の中の夫を見たのはほんの一瞬でした。「これが、今生の別離か」と覚悟して。泣き叫けぶ幼児を背に、夢中で見送った悲しい思い出。

現在の国鉄大阪駅の東、阪急との間のガード下を、南北封鎖して、その中へ出征兵をいっぱい集めて、順次、列車で運んだのです。

その頃、軍隊でも物資が不足していたらしく、歩兵ですのに銃も持たず、水筒も竹筒で、竹行李（たけごうり）の弁当箱を背に斜に掛けて、勿論、背のうも持たない有様でした。

その兵士達を列車で西へ送り、玄海灘を三隻の輸送船で朝鮮（今の韓国）へ渡ったらしいのですが、夫の乗った真ん中の船だけが無事で、前後の二隻の船は魚雷に触れて沈没、兵士達は戦場へ出る事もなく、玄海の藻屑と消えてしまったらしいのです。

その後、国内でも空襲が激しくなり、三月の大阪、神戸の空襲に被災せず残った処も、日毎夜毎の来襲で、京都、奈良以外の都市はほとんど焼き尽くされ、千里丘でも六月頃からは、警報の度に頭上を通過する敵機が多くなり、恐ろしい毎日でした。激しい日は、一日にB29と小型艦載機と合せて、六百五十機も来襲した事もありました。その音だけでも、列車の通過する鉄橋の真下にいるような轟音（ごうおん）でした。機銃掃射の弾丸が屋根を通して、押入れの上段に積んだ布団を数枚貫いて止まっていた時もありました。今の坪井のガード下へ、莚（むしろ）と布団を持って、子供と一緒に避難をした日もありました。

その頃は、食糧の配給もほとんど無くて、たまに小さなじゃが芋数個とか、大豆、さつま芋のつるまでが配給の食料品でした。幼児を連れ、私の胎内には長女が宿っていましたので、買出し

に行くこともできず、軒先で作った南瓜や、大豆、野草等を入れた、しゃぶしゃぶの雑炊で、やっと命をつないでいる状態でした。そんなでは、乳離れして間のない二才足らずの幼児には、不消化で無理な食べ物でした。毎日下痢がつづき、次第に痩せ細ってしまい、大阪にいた頃、生後六ケ月には、健康優良児として表彰された子が、見る影もない程に弱っていました。高槻の医大病院へ通院し、なんとか死なせずに済みましたが、今思えば栄養失調であったのです。

八月十五日、終戦の日の正午、詔勅のラジオの放送は病院よりの帰途、国鉄高槻駅のホームで聞きました。トギレ〳〵で、その意味も充分にはわかりませんでしたが、「忍び難きを忍び」とか「時局を収拾せん」との言葉が、今も耳に奥深く残っています。

その時私は、これから先「国民の生活はどうなるのか」との気持と、戦地の人達のこと等、色々の思いが頭の中を駆けめぐり、身体中の力が一度に抜けて、打ちのめされたような虚脱感に襲われ、そのままホームの床へ、へな〳〵と座り込んでしまいました。

ホームに居合せた人も、皆、言葉もなくただ呆然として黙っていました。沈黙の数分間が私にはとても長かった気がします。

それから、どこをどうして家に帰ったのやら覚えてはいません。おそらく、夢遊病者のようであったと思います。その夜は、綿のように眠った事だけは覚えています。（警報で夜中に起こされる事がなかったので）

終戦のその日以後はまたヤミ屋によって物価は日々高騰し、はげしいインフレとなり、庶民の生活は苦しくなり、法に従って、ヤミ物資を拒否すれば、餓死するよりすべのない日が来るのです。

「赤いリンゴにくちびる寄せて」とリンゴの唄が流行しましたが、その時のリンゴ一個のヤミ値が、現在のお金で約二、五〇〇円か、三、〇〇〇円位したと思います。

戦地の夫は無事帰還しましたが、戦地で落馬した時の傷が痛む時もあると申します。義弟は昭和十八年五月、アッツ島で、二十五才の若さで玉砕戦死しました。

「戦争なんて大嫌い」声を大にして叫びたい。しかし軍国主義のその頃は、私達は、言論・出版・集会・結社の自由を奪われ、大君と神のように教えこまれた天皇の名のもとに、戦争に引き込まれ、好むと好まざるにかかわらず、男子は一枚の赤紙で動員、忠君の誓いをたたきこまれ、侵略に加担してきたことの責任を痛感いたします。

戦後四十年、悲惨な過去の記憶も風化し、また戦争を知らない若い人達の多くなった今日、非核三原則も空念仏の如く、このままでは、人の手で作った核によって、人類皆殺しの恐れを感じ、子孫のために、われわれの戦争体験を語り伝えたく、拙い筆を取りました。限られた紙面では、まだ書き足りませんが、またの機会があればと思います。

現在の私達は、平和で、自由で、あり余る食物を飽食し、沢山の物資に囲まれての生活をしていますが、これでよいのでしょうか。

中国に残留された人達の肉親探しや、今も原爆の後遺症で苦しんでおられる方達には、まだ戦争は終わっていないと思います。

また、戦地や原爆等、戦争のために犠牲になられた多くの方々のご冥福を祈り、二度と悲惨な戦争を起こさぬように誓って、私達の町のように皆で力を合せて世界の平和を守りたいと思います。

空襲警報発令

Y・Tさん　当時43歳
摂津市別府

戦後の食糧難の時代もそろそろ終わりに近い昭和二十七～二十八年頃の暖かい春の日の午後、私が兵庫県穴栗郡山崎町に住んでいたときのこと、私は隣の家に住む同級生のチトちゃんと菜の花を摘んでママゴト遊びをしていた。近所の家の軒下にはお布団や洗濯物が干してある。でもわが家には家族が毎日使っている布団以外は見当らない。おかしいな、私が幼稚園に行っていた頃、私の好きだったお布団があったはずなのに、どうしたかなとふと思い出した。

縁側でつくろい物をしている母に向かって、私は「お母ちゃん、家にあったお客様用のお布団どうしたん？」私の問いに仕事の手も休めずに、母は「あんたらが皆んな食べたんや」「え？お母ちゃん、お布団やで、お布団なんか食べられへんのに、裏が水色で表には紫や桃色の花が付いていたでしょう」「そおやね、あのお布団はみんなお米やイモや野菜に交換して食べたんや」「お布団だけやないで、大きななべや、オカマもお母ちゃんの着物や帯も、それに掛軸から花瓶もやで。子供らは皆ええ歯してるわ」と言って仕事の手を休めた。

「しっかり食べて早く大きなっておくれ」と母はにこにこしながら言った。「子供らだけには、ひもじい思いさせられん。育ち盛りの子供に、ひもじい思いさせると心まで貧乏になったら取り返し出来んからな」

こんな話を聞いたのは今から三十年以上も昔の事だ。私は昭和十六年の開戦の数カ月前にこの世に生を受けている。終戦間近い二十年には四才で、人間一生の内で一番に知恵を吸収する時期でもあった。

「空襲警報発令」「空襲警報発令」とメガホンの声に、生まれて三ヵ月程の弟をおんぶした母は、私に防空頭巾と小さなリュックサック(母の帯芯で作った物)を持たせる。姉には何が入っているのか知らないが、何時も大切にしている袋を持たせ、「お母ちゃんから離れたらあかんで」と口ぐせのように言っていた母。どこに行ったのかまったく記憶にない。でも母に手を引かれ、家の外に出ると南の空が明るい事があった。「それは姫路がB29の落とした爆弾で火事なんだ。山崎にもB29が来たら大変な事になる」と、小学校六年生の兄が美しい夕焼けのような南の空を見て説明してくれた。

その頃の事を一つだけはっきりと覚えている。六月の終わり頃の黄昏れ時「空襲警報発令」が出て何時ものよう

にどこかに行った。しばらくしてなに事もなく解除になって帰って来ると、家の奥の台所の方で誰もいないはずなのにゴトゴトと音がしている。人影を感じたのか、兄は素早く裏口の方に外から廻った。そして母が表から奥に入ると、裏口へ逃げ出した人があった。一足早く裏に廻った兄は「ドロボォー」と大声を出した。その人は兄につかまった。足に包帯を巻いた十二～十三才の男の子が台所のオクドさんに置いてあるなべの雑炊を食べていたらしい。家族の夕食にと母が作った物で、少しのお米にサツマイモの茎や野菜の入った雑炊を半分以上食べていたのである。母は近所では見かけないその子に「どうしてこんなことをしたのか」と訳を聞いたら、その子は「ごめんなさい」と泣き出した。そして「お母さんが空襲で亡くなり、自分もケガをして病院へ行っての帰り道で、昨日から何も食べていないので悪いと思ったが、誰もいない家に入ったら台所で食べる物を見つけ、これを食べたら死んでもええわと思い雑炊を食べた」と言った。その子を叱らなかったお母ちゃんは、まだナベに残っている雑炊を茶碗に入れてやり、「ゆっくりおあがり」と言って食べさせた。お腹の空いている私達はただ見ていた。その子の帰って行く後姿を見送ると、現実にかえったように「夕食はない」。お蔭で私達の夕食は、ジャガイモを湯がきつぶして型を作り、梅干しの汁で味付けをしたジャガイモダンゴが夕食となった。あの時の味が昨日のように思い出されるのが何とも不思議である。だが私はあの男の子を憎むことはない。

いまの日本は物質的には豊かすぎる程である。だが人の心は飢えてはいないだろうか。人間にとって何が幸福なのか、四十才を過ぎた今、私は自分にもう一度問いかけている。

戦争の思い出

K・Hさん　79歳
摂津市鳥飼八町

門前の川を舟にて幾かよい
　甘藷作りし遠き思い出

亡弟と休閑地なるかの池に
　米作りせし遠き日のこと

終戦の句集出して一人よむ
　余寒厳しき亡弟の日に

柿剥けば又思い出ず戦時中
　休閑地にて分けし味わい

一区二区と徒歩にて堤を通よいて
　かの畑に麦刈りし日も

戦時中拍子木打ちて地下中を
　火の用心と廻りし夜も

戦時中食糧不足に粉食や
　粥食のみに過ごせし日の事

新幹線の用地となりぬ鴨の沼と
　句作せし日の遠き思い出

私の戦争体験

S・Sさん　52歳
摂津市昭和園

昭和十五年四月、尋常小学校に入学した私は、昭和十六年の太平洋戦争勃発によって、いやおうなしに国民学校（小学校の名が改名された）の生徒となりました。六年生のとき終戦。それからは、歴史や修身の教科書のあちこちを墨で塗りつぶす（戦争中良いとされたことが戦後は悪いということになった）日が続いて、昭和二十一年三月終戦後のどさくさの中で、修学旅行も、卒業の記念写真も無く卒業しました。戦争中の学校制度が無くなり、昭和二十一年四月、自分の志望する旧制の女学校に入学したのも束の間、またまた制度が改正となり、本人の意向に関係なく、学区制によって強制的に決められた学校へ転校させられ、最初に志望した学校と全然違う新制高校を卒業しました。

ふり返って見ると、私の学校生活は、戦争、終戦ということで、くるくると学校制度が変わるままに、波にただよう木の葉のように、あちらこちらと振り廻わされて、落着いた雰囲気などは全然無いままに終わってしまった感じで、いつも心に何かわだかまりを残しています。

しかし戦争中、そして終戦後は学校の事などは二の次で、その当時の食糧難は子供であった私にも、いまだに骨身にしみている感じです。

その頃父は鐘紡の病院医で京都の山科の社宅に住んでいましたが、社宅の前の広い公園は、いつしか畑に様変りし、さつまいも、馬鈴薯（しょ）は勿論のこと、食べられる物は何でも、庭にもかぼちゃ棚を作って食糧難に対していました。人の心もトゲトゲしくなり「いも」を盗んだとか、盗まれたとかのトラブルもあって、子供の耳にもそれが聞こえてきました。最近〝いもづる〟を食べる催し等があって、「おいしい」との評があると聞きますが、あの頃は、油もなく、醤油もなく、砂糖もなくのないづくしで、その中の〝いもづる〟は決しておいしい物ではありませんでした。

そのうち、東京から姉一家が疎開して来て、我が家は、食べる口は二倍に、食糧はどんどん乏しくなって行くという有様で、その頃の母は皆に食べさせるために大変だったろうと思います。ある日の夕方だったと思います。大人達が「明日食べる食糧をどうしようか」と深刻に話し合っているのを小耳にはさんだ私は、たまらなく悲しくなりポロポロ涙が出て止まらなくなり、母をびっくりさせたこともありました。筍（たけのこ）も旬の頃にちょっと食べるのはおいし

いものですが、主食として毎日毎日食べさせられると、かなり辛いものです。

私は大人になってからも、しばらくは筍アレルギーで、筍の匂いがいやでした。どんな物でも、母はいろいろ工夫して食べ易くしてくれましたが〝ドングリの粉〟が配給になった時には、さすがの母も困ったらしく、私も手伝って、すり鉢ですったり、丸めて焼いたりしましたが、手間ばかりかかってまずく、お腹が空いているのに多くは食べられませんでした。

姉婿はこの頃結核を患い、栄養が第一という病気なのに充分栄養が摂れず、父が医師であったにも拘わらず終戦を待たず命を落としました。

終戦後も食糧難はつづきましたが、進駐軍（アメリカ軍を終戦直後はこう呼びました）からの真白い小麦粉が配給され、その粉で母が作ってくれた〝蒸しパン〟は、それはそれはおいしいもので、学校から帰ってきてこの〝蒸しパン〟を見ると飛び上がるほどうれしかったものです。今でもその時の味が忘れられず、店に売っている〝蒸しパン〟を買って食べてみても、あの時のおいしさにはおよぶべくもありません。

ひもじい思いの毎日でしたが、空襲も受けず、両親も揃って戦中・戦後を過ごす事のできた私は幸せでした。

私の主人は私より少し年上ですが、奈良の海軍経理学校在学中、神戸の大空襲でお母さんを失い、お姉さんも大変な火傷を負われました。十六歳の多感な年頃で母親を突然亡くした気持はどんなだったろうかと思います。家を焼かれ、母を失い、火傷した姉を抱えてのその後の主人一家の苦労は大変だったようです。主人と結婚してそろそろ三十年近くになりますが、当時のことについては一番親しい私にでさえ、ときどきポツリ、ポツリと話すだけで、多くは語りません。

私のように、お腹がいつも空いていた、着る物、履く物がなかった、というような体験は年月と共に風化していくものですが、主人のように、全財産を失い、肉親を亡くした人達の心の傷は深く、いくら年月がたっても、なかなか癒やされるものではないのでしょう。

私の叔母も満州から引揚げ、やっと内地の土を踏んだのに心身共に疲れ果て、乳のみ児と五人の子供を残して亡くなりました。姉の嫁ぎ先の義兄は、外地からの引き揚げ直前に、家族から一人引き離されて銃殺されたらしい……と聞きました。

戦争のために、私の周囲の人びとより、もっともっと辛い、悲しい運命に無念の想いをされた人々は数限りなくあるのではないでしょうか。いま、テレビで中国残留孤児の方々の事が報道

されていますが、それを見るたびに「戦争さえなかったら……」「戦争さえなかったら……」という声にならない声で何万人、何千万人の人々が、幾度も、幾度も、つぶやかれたのではないかと思うのです。

また私は、障害を持った息子の母親ですが、戦争中のように、人間の価値を〝役に立つか、立たないか〟で判断するような世の中にだけは、なって欲しくない、そんな事がないようにと、念じております。

暗闇とまっ赤な空と

H・Kさん　45歳
摂津市鳥飼上

私は小さい頃、大阪市旭区に住んでいました。

おぼえている空襲の思い出にしても、カワラの落ちる音をきいた時と、広場に逃げてまっ赤な空を見た時とがいったい同じ日なのか、別の日なのか、はっきりしません。

ただ、隣組のおじさんが死んだ時は、声をきいたすぐその後のことだったので、大変なショックを受けたことはおぼえています。

時期としては、多分昭和二十年五、六月頃、私が六才の時のことですので、はっきり書くことができず、頭の中に残っていることだけを、ただ文章として書いてみました。

ある夜のことです。

サイレンの音がはげしく鳴り響き、「空襲警報発令！」という声と共にバタバタと人の走る足音がしました。

私は暗闇の中で目をさましました。（早く防空壕へ行かなければ……）と思った私は、母を呼びましたが、シーンとした中に自分の声だけがはね返ってくるばかりです。

（早く電灯をつけよう）と、いつも電灯をつけるときに使う踏み台を手さぐりでさがしました。

すこし這って前に進むと頭をゴツンと壁にぶっつけました。

右へ行っても、左へ行ってもすぐにゴツンと壁にぶつかります。

私はとうとう大声で泣きました。

その泣き声がすぐにはね返ってきこえた時、私がもう防空壕の中に居たんだということに気がつきました。

夜中にサイレンが鳴り、ぐっすり眠っていた私は母に抱かれ、防空壕に移されていたのです。

そして母は弟を連れに家に引き返していました。ほんの少しの間の出来事だったのですが、私にとっては、暗闇の中でたった一人、自分の声だけしかきこえなかったこわいこわい経験でした。

そんなことがあった後も、サイレンが鳴るたびに、防空壕と家を何度も往復しました。

サイレンの音におびえながらいつものように防空壕に入って小さくなっていた時、突然バリバリと物のこわれる大きな音がしました。ドスン、ドシン、大きな地ひびきと一緒に防空壕の上にガラガラとカワラがころがり落ちてきました。

隣組の班長をしているおじさんが、「防空壕に入っているとあぶないぞ！焼夷弾が落ちたら、むし焼きになって

しまうから、早く出て安全なところへ逃げろ！」といって走っています。
　飛行機の飛ぶ音、バリバリという音が続く中で私たち家族は防空壕の中で抱き合い、じっとふるえていました。
　防空壕の戸をたたく音がしたので母が様子を見にいくと、近くに住んでいたおじいさん、おばあさん、おばさんたちが、
「家も防空壕もつぶれたので逃げてきた」と、みんなドロまみれになっていました。そこで防空壕にいては、あぶないので広い空地にみんなで逃げました。
　草ボーボーの空地に国防色のシートをかぶってジーっとしているのです。
　ゴーゴーと飛んでいる戦闘機の爆音、爆弾の落ちた時のドシンドシンという大きな地ひびき……、私は弟としっかり抱き合って、ブルブルふるえながら、シートをそっと持ち上げて外を見ました。
　夕方でもないのに、空がまっ赤に焼けているのです。
　たくさんの家が炎につつまれてメラメラと燃えています。
　（当時、三才だった弟も、戦争の記憶として「まっ赤な空」は忘れていないといっています）
　そして、しばらくすると黒い雨がザーザー降りました。
　私達の家は、幸い焼けはしませんでしたが、天井は穴だらけ、雨もりがすごかったのをおぼえています。
「防空壕の中はあぶないから逃げろ！」と私たちに知らせて走りまわっていた隣組のおじさんが、材木工場（爆弾が落ちて何もかも吹きとばされ、広っぱのようになっていました）のまん中にたおれて死んでいました。
　そばに爆弾の落ちた跡の大きな穴がポッカリ口をあけていたのが印象的です。また、戦争は私の遊び友達をなくしました。
　姉は石川県のお寺に学童疎開しました。
　仲良しのシズエちゃん、コウちゃん一家は北海道へ……近所の人達もどんどん田舎へ疎開して行きました。
　そして、その頃仲良くしていた鉄工所の一家は空襲の時、オート三輪で広場に逃げましたが、爆弾を落され土に埋もれてしまいました。
　広場には大きな穴だけが残り、遺体も見つからなかったそうです。

戦争体験より学んだこと

G・Mさん　45歳
摂津市学園町

「憲法を守り人間を尊重する平和宣言都市摂津市」いま平和であればこそ、この体験記を後世に知らせることが我らの使命であり、語りべとして伝えていくべきだと思います。

戦争と平和、この文字は故周恩来総理は、ケンカの後は仲良しになるといわれたことがあります。アメリカと日本もそうです。子供の世界でも兄弟ゲンカといわれるように、仲がいいからケンカをするようでもあります。ケンカは、強い者が決まるまではつづくようです。また、チョボチョボでもケンカが多いようです。このケンカの大きいのが戦争と変わっていくように思います。

私は昭和十五年一月六日生まれで、満五才位の思い出でありますが、当時はお母さんにつれられて、よくおしっこに行ったあとに、立ったままで東の空の空襲の状況を、映画のように見たものでした。飛行機の爆音が、いまでも小さな胸に鮮明に焼きついています。また、近くに飛行機が頭からつっこんだ現場も多く見ました。飛行機の接触事故もよくありました。いま考えても身体中がカーッと燃えてくるように、子供心に大変な刺激が強く、寝ても、母と兄と、おじいさん、おばあさんで、家の中は真っ暗の、本当に三日位は同じ夢にうなされていました。私の実家は農家でありましたが、米は全部とられて、麦ごはんなどいい方でした。あわのごはんやイモごはん、イモガユなど食べ物は農家で作っている物で金をかけないで自給自足でした。

昔と同じく、山にいってはタキギをとって来たりして、お風呂やおくどさんをたいていました。また、鳥や獲物をとるためにワナをかけてはうさぎや小鳥をとったり、たぬきやキジなどもとってたべさせてもらいました。にわとりや卵はご馳走でした。山のある生活で狩りをしては食べさせてもらいました。川で魚をとってもらったのもいい味でしたので楽しく思い出されます。山のわらびやぜんまいやまったけをはじめ、いろんな種類の「たけ」を食べさせてもらっていました。しかし、いつも空腹でありました。私は小学校に行く前には、元気になってましたが、生まれたときにはお乳が少なく栄養失調でして、黒砂糖の配給で死なずに助かったようです。

また小学校に入る頃には昭和二十一年でしたが、メンぐち、ビーロン、くぎねんぼ、コマまわし、S字遊び、なわとび、輪まわし、おにごっこ、竹馬（雪足し）、竹トンボ、おしくらまんじゅ

う、きもだめし、カンけりで遊び、それに上級生が下級生をつかまえて、ケンカをよくやらされました。すもうなど金のかからん身体で覚えさせられる遊びが多くありました。村の祭りにしても、田畑でできたものが賞品になっていました。そんなときだから木の実、柿やいちじくやミカンや栗などがよく盗難にあっていました。

草でもたべられるものは、田舎ではしんとう、すかんぽ、ギシギシなどいろんな呼び方がありますが、塩をつけて、胃やけや胸やけ止めの薬としていました。梅なんかは少し早い位にたべて、疫痢（えきり）になって死んだ子供もありました。食べ物といったら進駐軍のジープを追いまわしながら、カンヅメをもった外人さんにサンキュウ・ベルマッチ、グッド・モーニングなんかいってカンヅメの中味をもらって食べたことがありました。中からカタパンやコーヒーやシュガーやなんかがでてきて外人さんもやさしい人がおりました。

やはり、盆と正月の思い出はお頭つきのイワシが良かったし、米のごはんがあったときが一番うれしかったです。それとおじいさんが仲人をやったら、かけん魚といって、大きなブリが家の中にぶらさがっておりました。それを少しづつ切って、おしょうゆに、にんにくの葉っぱをつけて白い米のごはんにかけてくれたときのうれしさは忘れることができません。

以上は戦争後の思い出にもなったようですが、戦争によって発生する人の心のすさみはどうすることもできないと思います。人が人を殺し合う、こんな悲惨な戦争だけは絶対にあってはならないし、起こさせてもなりません。日本は世界の中の唯一の被爆国として、今後は核の問題に対しても、世界のどこの国からも第三番目の核を、地球上のどこにも落させてはなりません。

人類願望の平和を考えながら、いま私は摂津市の被爆者の会といっしょになって被爆者の健康増進と福祉の向上につとめています。

被爆者の会が年とともに風化していく中で北摂から大阪府へと平和の鐘を、そしてさらに世界へと広げていく。その使命を深く感じ、その礎となっていく覚悟であります。

家屋疎開と父の死

Ｏ・Ｓさん　59歳
摂津市東正雀

戦争、という文字を見たり、言葉を聞いたりすると、私の頭には、恐かったこと、辛かったこと、悲しかったことがつぎつぎと浮んできますが、しかし、年と共にその記憶も薄れてきます。

当時、私達四人姉妹は両親と大阪市北区に住んでいました。戦争が激しくなり、家の近くに大阪駅とダイハツの軍需工場があるという理由から、五日間による強制家屋疎開の通知があり、立ち退く事になりました。どのようにして父が探して来たか分かりませんが、一家は住吉へ疎開することになりました。運送の車などなく女ばかりで、父も大変だったと思います。大八車に家財を積み、私達は父の後押しをして出発しました。

梅田から御堂筋を難波、そして堺の方へ、日頃、「女の子ばかりでお国の役に立てない」と嘆いていた父は、これもお国のためと車を引いていましたが、とても辛かった一日でした。でも、その晩の星空がとても綺麗だったのを覚えています。きっと下界の愚かな戦争を悲しんでおられたのでは……。

父は疎開して間もなく、腎臓病にかかり寝込むようになりました。顔や手足がむくんできました。戦時中のことですから、食事、安静等十分できません。母は、腎臓病には西瓜が良いと聞き、農家へ着物と交換に、西瓜を求めて出かけました。帰途、何度も空襲警報にあい、防空壕に避難、お米はなくしましたが、西瓜だけは死んでも離さない、と持ち帰りました。父が美味しそうに食べるのを見ていて、母が泣き、私達も泣きました。しかし、父は回復せず、昭和二十年八月、終戦を聞き、もう壕へは入らなくても良いんだな、とホッとしたのか、敗戦から二週間後の八月末に亡くなりました。病気の父にとって、防空壕への避難は苦痛だったらしく、「もう畳の上で死んでも良いから」と嫌がっておりました。

父の死、それからが大変でした。日本中が敗戦で混乱していて、お葬式がなかなか出せなかったのです。焼場へ行っても燃料が無いので、「誰かもうお一人なくなられたら車を出します」との返事。考えられない霊柩車の相乗りなのです。「仏様を焼く薪割りもして下さい。もしできないのでしたら、薪割りをして貰う人のお金を払って下さい」とのこと、女ばかりでとても困りました。真夏のことですから仏様も放っておけません。頼んで頼んでやっと亡父一人の車を廻して貰い、薪割りもお金を出しました。ドライアイスなど勿論なく、仏様は四日も五日もその

ままだったので、お棺に納めた後、ふとんを通して畳まで汚れていました。いま考えても亡父の最後が哀れでなりません。

葬儀場には、赤ちゃんや子供さんはミカン箱などに納められ、自転車やリヤカーで運んで来られた方もあり、遺族は泣くことより、お葬式を出せるか、どうかのことで走り廻っておられたのだと思います。

戦争で多くの人びとの尊い生命が奪われましたが、海軍軍人だった叔父、それに級友もそのなかの一人です。私は、病死とはいえ、亡父も戦争の犠牲者だと思っています。苦労した母もなくなりました。「戦争さえなかったら、お父さんはもっと長生きできたはず、戦争がお父さんの命を縮めた」といつも嘆いていた母。母の心には、あの時の西瓜を食べていた亡父が、焼きついていたのではないでしょうか。

私は平和の尊さを、なくなった人達と共に訴えていきたい。

平和について

B・Mさん　30歳
摂津市鳥飼西

マスコミを通じて、親に聞いて、或いは
映画でしか、
戦争の悲惨さを知らない我ら世代よ
明日の希望を奪い、生きる望みさえも見
失った父母の呻(うめ)きを
耳にするたび、私は戦争を憎み、平和で
あることの尊さを噛みしめたい
人類がお互い唖(いが)み合うことなく、互いに
手を取り合って、平和を謳歌できる
そんな真の平和が一日も早く来ることを
望みたい

戦争体験

Ｉ・Ａさん　60歳
摂津市南別府町

昭和二十年六月一日大阪大空襲のあった日、私は大阪市港区の某軍需工場で女子挺身隊として働いておりました。

当時は一億総動員で青年男子は勿論のこと、婦女子も旧制中学生も女学生までも学徒動員され「撃ちてしやまん」「欲しがりません勝つまでは」と今で言う、スローガンのもとに、連日の空襲や食糧不足にもめげず、お国のため一生懸命銃後を守っておりました。さて、六月一日午前九時警戒警報が発令され、サイレンがまだ鳴りやまぬうちに、もう空にはあの重苦しいＢ29の引きずるような爆音が唸っています。

「偵察機かなあ」と言いながら課長が社外に出て行くと、二、三人の営業部の人が後につづいたので私も毎夜苦しめるＢ29を一目見ようと外に出て見ると、一機又一機がキラキラ美しく、青空に輝きながら頭上に差しかかってきます。誰かが「あれは高度七、八千米位かなあ」「いや、一万米はあるで」と口ぐちに見とれていると、突如「空襲警報」のサイレンが鳴り響き「待避せよ」の命令「待避」！！「待避」！！と、いままで見とれていた者達は慌てふためいて分散しました。私も素早く女子防空壕へと走りました。早や壕内には防空頭巾を真深かに被り小さく身を寄せあって、ほとんどの人が待避していました。外は慌ただしく異状な空気がヒシヒシとせまり、何か大声で叫んでいる様子でした。

やがてものすごい爆音と共に、この地球がひっくり返ったのかと思えるほどの大音響、ドードードードンと地鳴りがすると同時にものすごい砂塵が壕内にザザーザッと吹き込み入口の戸がバババンーとふっ飛びました。

「お母ちゃん！！お母ちゃん！！」「助けて！！」皆が口々に騒ぎ出しました。

「静かに、静かに」「落ついて、落ついて」となだめる者やそれはそれは大へんなものでした。

その時、警防団員が慌ただしく、入口で「みんなここは危い、隣の壕までもう燃えてるぞ！！」「早く、ここを出ろ」の叫び声に一瞬みんな我に返りつぎつぎに壕を飛び出し、運河に繋がれていた石炭船に飛び乗りました。私も乗ろうとすると「もう危い、これ以上乗ると船が転覆するぞ！」の大声に仕方なく、川べり伝いに走りに走りました。船に乗らなかった者、乗り切れなかった人びとは一生懸命火の海を逃れようと群をなして逃げ惑いました。

あの青空は真暗闇となり、爆音と爆弾の破裂するバンバンの金属音に泣き

叫ぶ声が入混って、さながら戦争映画そのものでした。ああ、これが戦争というものか、いつ上陸してくるかも知れぬとみんな覚悟だけはしていたけれど、実際にこんな恐ろしい目に遭遇し、初めて戦争の恐ろしさ、こわさをしみじみと体験した瞬間でした。後日分かったことですが船に乗った者は全員焼夷弾の直撃を受け、あたら若い命を無残にも犠牲になったとのこと、死の寸前まで同じ壕にいた同僚やご両親に対し、何ともいたたまれぬ思いで胸かきむしられ悔悟の念にかられるのです。「ああ、もうこれ以上逃げることはできない」前は海、どす黒い異様な匂いがただよった海水が牙をむけていました。

どこから集まってきたのか大勢の避難者が真っ黒な煤(すす)けた顔で目だけギョロギョロさせていたことをはっきりと憶えています。あの恐ろしい、地獄の火の海をくぐりぬけてきたのでしょう。幼児や学童は大半疎開していたので子供の姿はあまり見られませんでしたが、中には母親に背負われた赤ん坊、手を繋がれた子なども見ました。なん時経ったでしょうか、ようやく空襲警報、つづいて警戒警報が解除され張りつめていた緊張が解けると、皆ヘタヘタとその場に坐り込んでしまった。誰かが後の方で「これで大阪も全滅や」と言う声に振りむくと、今まで立ち並んでいた工場や民家が跡形もなく一望に見渡され、何一つもなく黒煙が上がり、まだブスブスとあちこちで火の手があり、あたりは熱気で地面はムンムンとしており、空襲のはげしさを、まざまざと見せつけられました。

当時、母は弟妹を連れて疎開しており、父と二人で家を守っておりましたが、二、三日前より体調をくずし何も食べていなかった父が、逃げ遅れて焼死したかも知れないと急に心配になり家の方向へ向かいましたが、何の目標もなくなっており、分からぬままに人の歩いていく後についてどんどんと歩きました。両側には真っ黒こげになり、手足が短く縮んでキューピー人形をひっくりかえしたような形の死体、あるいは直撃を受けたのであろうか、母親の傍でゴソゴソはっている赤ン坊の側で、祖父らしい人が泣きくずれている姿をまのあたりに見、思わず目をそむけてしまったことなど、それはそれは筆舌に尽くし難く、四十年経過した今も決して忘れることはできません。夜明け近くになって、父が無事避難していることを人づてに聞き、やっと再会できたのは翌日の夕方近くだったのです。二人は抱き合って無事を確かめ、声を出して父も私もオイオイと泣きました。父は私を、私は父を探し合いながら、混乱のさ中それは長い一日でした。最近、中国残留孤児が肉親捜しに祖国

を訪れ、運よく再会でき、その喜びを肩を取り合って泣いている様子をテレビで見るとき、とてもいたたまれず、涙が溢れて画面が見えなくなります。たった一日逢うことができなくても、その欲求をおさえることはできません。ましてや四十年もの長い間、これまでお互いに耐えてこられた方がたに対し感無量、なんとお慰めしてよいやらその言葉もありません。これも戦争のためです。

いま振り返って二度と戦争は嫌です。人間と人間との殺し合い、これほど恐ろしくて悲惨なことはありません。もうこのような犠牲者、被害者は出したくありません。私ども世代の者は男子は勿論、女・子供・幼児に至るまでこの苦しみに耐えて参りました。戦争を知らない世代が半数に近い時代となった今日でも、戦争の傷跡は完全に消え去ることなく、原爆症でつぎつぎに命を失い、いまなお苦しんでおられる方々が沢山おられることでもよく分かります。

私の拙い一編で戦争の恐ろしさ、痛ましさが少しでもお分かり頂けたらと、ペンを取った次第でございます。

空襲の思い出

Ｉ・Ｔさん　66歳
摂津市正雀

私は昭和二十年六月、神戸で被災した。ブゥーブゥーフゥー、あっ空襲警報だ！警戒警報は約二十分前に出されていたが、まさかここが空襲に遭おうとは思いもよらなかった。

早速、防空頭布をかぶるや否やザザーッ、ザザーッ（焼夷弾の落下間近の音）。この近くに落ちると思い、早速家の下に防空壕を掘っていたので、父と二人で飛込み両手で耳をおおってしゃがんでいた。と同時に何か光るものを感じた。ドカーン、ガチャガチャ（焼夷弾が落ちてその振動でガラス障子がこわれた。私の家は薬局を経営していたので表は大きなガラス障子になっていた。）

「ああ、もうだめだ」ふと首を伸ばして裏の方を見ると台所付近に焔（ほのお）の影が見えた。やられたと思った。瞬間、表通りで「みんな早う出てこんと死んでしまうぞ」とどなっている兄の声（兄は私の家の向かいで写真館を経営していた。）急に元気が出て父と私はとび出した。そこには兄が立っていた。ふと見ると四つ角の八百屋さんがえんえんと燃えている。そのうちに兄嫁が一人の幼児を肩に背おい一人の幼な子の手を引いてでてきた。あちらからもこちらからも人々が出て来た。道路に造った防空壕から出てくる人もいた。

「どこへ逃げよう」「電車道は広いからよいだろう」「いや電線があってあぶない」と言っているうちに八百屋さんは焼失した。その間もＢ29は頭上をとんでゆく。「敵に見られると機銃掃射をうけるかもわからんぞ」と人びとは口ぐちに叫んでいる。Ｂ29の姿が見えると、みな焼け残りのヒサシの下に身をちぢめ両耳を手でおさえていた。ふと見ると私の家も火がついて燃えている。焼け残りの家の軒下に立ってしばらく茫然と見ていたが、私の家ももうおしまいかと思うと、ポトリポトリと大粒の涙が頬を伝う。

しかしそんな感傷に浸っていることはできない。早く逃げなければここも燃えてくる。「海岸へ行こう、もう海しか行く所はない」（海岸までは二丁程の距離）「そうだなあ」と言って兄と兄嫁（一人の幼児はおんぶし一人の幼な子の手を引いて）と私と父が横列になって六人が海岸を目指して走り出した。しばらく走ると眼前の家が燃えかけている。といって引き返すこともできない。「仕方がない、あの燃えている所でも走って通り抜けねば逃げ場はない」「そうだなあ、できるだけ体を低くして通り抜けよう。そしたら海まで行けるだろう」と言って六人が焔の端を通り抜けて、やっと海岸へ着いた。

もうすでに沢山の人が来ていた。そして後から後からと被災者がやってくる。その間にもB29は編隊をなして飛んでゆく。そのたびに砂浜に置かれている漁船の下にもぐりこんだ。「ああ早く解除になってくれるといいのに」と思い、生きた心地はしなかった。やっとのことで解除になった。ぞくぞくと海へのがれて来ていた人の山ができた。兄嫁の子もおんぶされていた児は口の下が少し火傷していた。

「もう若宮町は全滅や（若宮町はここの市電で三つ位西方の所）。一軒も残っていない。ここまで来るのがやっとだった。防空壕の中でも沢山死んでいた」と言って疲れ切った様子だった。また他の人は「腕をやられた」と言って血を流している人、またモンペの布がボロボロに穴があき「足をやけどした」と言う人などさまざまだった。

私達はお蔭でまあ無事に避難できたと思った。

しかし今からどうすればいいのだ。帰る家は焼土と化し食糧はごく僅かで、貴重品カバンに入っているだけだ。みんな不安と恐怖のいりまじった顔でいっぱいだ。そのうちに叔父（母の弟だが母はすでに早く病没し、叔母は空襲がはげしくなる二年程前に病没しているので一人暮らしだった）が「うわさを聞いてかけつけて来たがやはり家が焼けていたので、どこへ行ったのかと思ってあちこち歩いていると、大勢の人が海岸へ行っているので見に来た」とのこと。よくもまあこの混雑している中で会えたものだと思って感謝した。そのうちに「焼け出された人は長楽小学校へ来て下さい」とのことだったので、みんなぞくぞくと歩いて行った。私達も叔父も人の群れにしたがった。「そこで証明書を貰い、行くところのない人は学校で一時落ち着くように」とのことだった。叔父は「うちへ来ませんか」とのことで皆世話になることになった。（叔父の家はこの学校から徒歩一時間位北方に当たる湊川町に住んでいた）

翌日何か残っていないかと、父と二人で焼け跡を来て見たが道を歩いても熱く、土など熱くてとてもさわれない。二日位は土が熱いのだと人から聞いた。やっと三日目にまだ土はぬくもりがあるが、ほじくりまわす位はできた。しかし何も残っていなかったが、不思議に水を入れていた鍋だけはひしゃげてはいたが残っていた。はっきり覚えていないが、三日位して証明書があれば何かくれると言うので加納町まで小さな小さなおにぎりを一個ずつ非常袋に入れて肩にかけ、防空頭布を持ち父はゲートルをまいて、貴重カバンを肩にかけ防空頭布をもって加納町まで出か

けた。加納町の方はまだひどかった。電線は落ちてヅタヅタになっており、大きな馬が道路上で横倒しになって死んでいた。そのそばでは、石の上に座らせてハンカチらしい物をかけて、しきりに泣きながら拝んでいる両親らしい人を見た。多分、子供さんを亡くしたのだろう。涙なくしては見られない光景である。

やがて目的の場所へ来ると長い長い列をつくって何かをもらいにきていた。その間にも警戒警報はひっきりなしに鳴らされる。

ほんとうに不安と恐怖心で胸中はドキドキしている。それはもうこわくて両親の里の徳島（父は市内だが、母はさらに二里程山の方へ入った所で、三方山に囲まれきれいな水が流れている川のあるのどかな山村）へ一時避難することになった。

学童疎開の歌

N・Kさん　51歳
摂津市正雀本町

学童疎開の思い出を書きたいと思い、ペンを走らせました。五年生のことですから、あまりよく憶えていない面もあります。嬉しかったこと、悲しかったこと位で日常生活は楽しいものでありました。

お寺の奥様が寮母さんであり、私達のお世話もよくしてくださいましたので、私達は幸福だったと思います。夜尿症で、毎日ふとんをぬらす子供がいて先生や寮母さんも大変困っておられたり、おやつがないので村の薬局で〝わかもと〟を買って来ておやつがわりに食べている子供が何人もおりました。

今年で（今冬）四十年になります。いまの豊富な食べ物に比べれば、戦争中は何もかも不足不足の我慢の時代でした。

一、口まだ乳のにほえども
　国の為とて勇みたち
　父母の膝元離れゆく
　我等は疎開学童ぞ〈

二、自然を友に日を暮らし
　ちりの都をよそにみて
　木の芽のごとく育ちゆく
　我等は疎開学童ぞ〈

三、いつも待つのは父母（ちちはは）の
　便りやおやつ早くこい
　勝つまで断じて頑張るぞ
　我等は疎開学童ぞ〈

この歌は、私達学童疎開の子供達のために、当時の香川県石田村のお医者さんが作って下さいました。私達はよく歌っていましたので今でも憶えています。

曲は愛国の花の曲です。

一、〝ましろき富士のけだかさを
　こころのつよい楯として
　御国につくすおみならば
　かがやく御代の山ざくら
　〝地に咲き匂う国の花〟

この歌の曲に合わせて作って下さったものです。今でもよく口ずさみます。

学童疎開から終戦にかけて

昭和十九年九月十六日、雨の降る朝まだ暗いうちに学校に集合し、駅までの道中を父兄や近所の人達に見送られて、遠く香川県大川郡石田村へと学童疎開に旅立ちました。その時は五年生で、親元を離れてゆくのにあまり不安もなく、遠足のような気持で汽車に乗り、宇高連絡船の船上より島々を眺めて楽しそうに行ったのをおぼえています。

高徳線造田駅に下車すると、石田村の国民学校の生徒さんのお出迎えをうけて、私達各一人一人につきそって宿舎の徳勝寺まで送り届けて下さったのが、とても感激しました。

お寺の庭には、私達学童疎開の子供達を歓迎するかのように萩の花が、大きな円形に二ヵ所植えられて満開に咲いており、うっとりしたものでした。大阪の親元をはなれ、遠い四国のお寺につき学友四十数人と先生と寮母さん、お寺の家族との生活でした。お寺での生活はものめずらしいものばかりでした。

当時は水道もなく井戸水をつるべでくみ上げて、洗顔したり洗濯したりしていました。近くの小川で洗濯したこともありました。

風呂は五衛門風呂といって鉄の風呂でした。最初はとってもこわかった。板がちゃんとしずまなくて困りました。食事の時も、塗りのとってもくさいどんぶり位の大きい食器でした。慣れるまでつらかったです。

私は鶏肉が嫌いなため、御飯に入っていると大変困りました。一口か二口しか食べられず友達に食べてもらっていました。当時は食べるものがなく、本当にいまの生活を見ると考えられない時代でした。おやつもなく、ときどき大阪の親がどこかで探しては、小包で送ってくれるおやつを、先生が集めて皆にわけてくれていたようです。

当時は先生もとってもきびしく、便所をうっかりよごす人がいて、翌日、先生が誰かと皆に聞くのですが、皆が黙っていると先生はおこって全員に罰として、両手を高くあげさせ足を曲げさせて、しばらくそのままの姿勢にさせていました。自分が便所をよごして悪かったと思う人は、先生の所まで申し出なさいと言うことです。私も半年しかいませんでしたが、全員の責任と言って罰をする、これが一番いやでした。

軍国主義の最中だったからと思いますが、お寺の中でも規律正しい生活でした。でもそのような厳しい中にも楽しいこともありました。夜などは皆で順番に歌を唄ったり浪曲をする人が二人おり、とっても上手でした。なにも

できない子は、三回廻ってワンと言わされたりして楽しい一時をすごしていました。

学童疎開のうちで、一番嬉しかったのは面会に父兄が来てくれるときでした。三人位順番にきて二晩泊まってお寺の生活や学校での勉強を見ていたようです。学校も石田村の学校の教室を借りていました。六年生女子と私達の五年生女子が、石田村の国民学校の友達の仲間入りをさせてもらって、運動会や珠算大会をしました。隣り村の富田村や長尾町にも同校の下級生達や上級生が、学童疎開としてきていました。十月の秋祭りには四人ずつ、村の農家に招待されて、おすしや甘酒等をご馳走して下さり、帰りにはいろいろな手づくりのおみやげをいただいて帰りました。当時はおやつもない時だけにとっても皆で喜びました。秋の稲刈りのあとの田んぼでタニシを取ったり、せりを取ったりしておかずにしていました。取る時がとっても楽しく都会ではできないことと思います。

昭和十九年九月十六日より二十年四月五日までおりましたが、この年の一月、二月は七十年振りの大雪とかで、私達の膝まで位の大雪で学校まで行くのも大変なので、お寺で勉強しておりました。雪の解ける時は、お寺の大屋根から大きな塊がドスンと大きな音をたてて落ちていました。当時は大雪もめずらしく思いました。

一人娘の友達はいつも、大きな人形を抱いて歩いたりふとんの中に入れたりしていました。この冬は寒いのにコタツもなく、夜は毛糸の服で足を包んで母が袋のように縫ってくれていた毛布の中に入り、コタツなしの冬をすごしたものでした。

近くの山を持っておられるところでは、私達に栗拾いをさせてくださったり、近くの軍人墓地では当番制で掃除したり、おまいりしたりしていました。

四十数人のうちの二人がある日、逃げて大阪に帰ってしまいました。大阪に帰ったことがわかるまで皆で心配しました。二人は五年生で、長尾から電車で高松に出て連絡船に乗り、また汽車に乗り次いだのでしょう。大阪へ帰るなんてことはいくら帰りたくても、普通の子供ではできないことでした。

栗拾いでもらって来た栗を干してあったらそれを生で食べてしまったり、他の学友達の持物に手をつけたりしていて先生によく注意されたりしていたので、お寺の生活がいやになったのかと思います。私達があまり苦痛に思わなかったのに、その二人は逃げてそのままもう来なかったようです。

そのうち戦争が激しくなって来たので、縁故疎開に行ける人は大阪の親が迎えに来て帰って行く人が増えてきま

した。私も姉が迎えに来て、大阪で残留組だった妹と二人で鳴門の祖父母の所に預けられました。六年生の初めから鳴門へ行き、六月には大阪の父母姉妹達が家を焼かれて鳴門へ帰って来ました。この頃は学校でもあまり勉強はしないで、土手のヨモギを先生と生徒で一緒に取っていました。空襲警報が鳴ると防空壕に入ったり、山越えして家に帰ったりしていました。そのうちに八月十五日終戦を迎えました。

九月に預けたままの荷物を取りに行くと学友は長尾寺に引越していませんでした。六年生になると、徳勝寺に預けてあった私の荷物も一緒に移動していましたので、長尾寺へ行き荷物を受け取りました。

K・Mさん　37歳
摂津市千里丘東

ふるさとの
四季の野山よ永遠(とわ)にあれ
海川ともに我らが守る

この子らに
未来をたくす責任は
我らが守る平和な世界

小学生の見た戦争

M・Tさん　47歳
摂津市千里丘東

私の生まれたのは昭和十三年。もう日中戦争が始まっており、確かに戦争中を過ごして来たのに、私自身が幼なかったのか、それとも四十年と言う時の流れがそうさせたのか、断片的な記憶はあるのに、それがスチール写真を見ているように前後がうまくつながらない。戦争体験というテーマで筆を執ってみたものの、忘れてしまっていることの方が多い。

サイレンの音が聞こえると、その度に授業は終わり、家まで小さな背中にランドセルをカタカタ揺らしながら走って帰る。それが小学校(当時は国民学校と言ってた)一年生の冬から二年生の夏への毎日の暮らしだった。

早い夕食を母と二人きりですませ、灯火管制のため、ハダカ電球の傘に掛けた黒い布の下で、ヒッソリと過ごす父の知人の家の離れを借りた疎開生活だった。私の一家が疎開先へ来たのは、大阪市内福島にあった家が、軍関係の工場のそばにあり、防火帯を作るためと強制撤去させられたためだった。近くへ引越したが、その家も東海道線の近くだからとまた引越し、二度目に越した家は学校へも近い、とよろこんでいた矢先、今度は学童疎開。それで仕事の関係から一緒に暮らせない父と別れて、柏原町(現大阪府柏原市)へ疎開した。柏原は大阪の南東、東に生駒山の南麓一面にぶどう畑が広がり、南には大和川が流れる静かな町である。

十九年に入学しその年の秋には幼な友達や、やっと名前をおぼえた同級生と別れて転校する者もいた。転校は淋しいもの。それも当時はあたりまえのことだったのか、毎日のように一人二人と同級生が減っていきます。

柏原町の学校では他所者とでも言うのか、とにかくクラスに解け込むのが大変だった。校庭の半分は耕され、イモやトマト、キュウリなどの畑になっていて、なれない都会っ子にもその世話をさせられた。草ひき、水やり、それから何をしたか忘れてしまった。

疎開生活の内にもまだ子供のこと、戦争のことなど本当のところわかっていない。楽しく遊んだこともあった。大和川での水遊び、魚や虫を追いかけたり、あまり近くまでは行けなかったが、現在の八尾空港へ飛行機を見に行って、戦闘機や練習機の発着を何時間も見ていたこともおぼえている。

サイレンの音で夜中に起こされ防空壕へ退避、中で聞くラジオは、はっき

り聞こえなかったけれど「中部軍情報、敵B29数十機が、紀伊水道を北上中」とか、といっていた。

「来るぞ」だれかがつぶやいた。息を殺して空襲の終わるのを待つより仕方ない。すると上空を通り過ぎるのだろう。身体中に響きわたるようなエンジンの音。「来たっ！」教えられたとおり手の四指で眼を押さえ母指で耳を押さえて、じっとしている。「早く帰れ」こんなせまい所から出たい。どれくらい、そうしていたことだったろうか。何事もない様子なので外へ出ると、北西の空が明るい。サーチライトの光が何条も空をなめまわしており、B29の影を写し出している。高射砲か、高射機関銃で迎撃しているのだろう。曳光弾が赤い点線を引きながら昇って行くのに届かない。歯がゆい思いでそれを見ていた。上空からは沢山の光の帯がまるで仕掛花火の滝のように降って来る。それが地上に着いたかと思う間もなく、空まで焦がす勢いでまっ赤になった。あの明るさはたぶん家が、街が焼かれているんだ。大阪が燃えている。父は大丈夫だろうか。家は、学校は？その夜は戦争の怖さを知った最初だったように思う。

大阪空襲が何度あったのか、昼も夜も敵機は来た。父の守る福島の家へ安否を気遣う母の手にひかれ、関西線で天王寺へ出て城東線か地下鉄に乗って梅田まで行き、それから歩いて家までたどり着く。その度に街の様子が変わっていた。電車の窓から見える焼跡、白い煙が出てまだ燃えている大きな建物。確か新世界の映画館だったと思うが、ビルが崩れて地下二階まで見おろせる爆弾の跡、天王寺公園では油脂焼夷弾の六角柱の殻があちらこちらにころがっていた。地下鉄の通路や広場には焼け出された人々が僅かな身のまわりの物を持って、放心したように坐り込んでおり、なかにはそこまで逃げて来て力尽きたのか、横になったままで息絶えた女の人がいた。その枕許に水筒があったのが今も目に浮かぶ。

ケガや火傷の手当てをしている人達、そんな中を足早に通り過ぎる人びと、手を貸してあげる余裕がなかったのだろう。

私の家は無事だったけれど、父の工場は焼けてしまった。その時から父も柏原へ来たので、なんとなく心強い思いがした。が食べ物の少ないのは相変わらずで、いま考えると一家三人が何を食べていたのか、どうして手に入れたのか両親に感謝する。

飛行場がある関係で、艦載機に追いかけられたことが私にとって一番怖かった。どこから飛来するのか、警報のサイレンと同時に南の方の空から

黒い点テンが爆音と共に、たちまち大きく見え、頭上へ来る。青黒いズングリした機体に赤い線と星のマークが見える。グラマンだ。パイロットの顔が見えるくらいの低空を飛ぶ銃を持った怪鳥は、翼を振りながら面白半分とでも思えるように鯉のぼりに大きな穴を開け、家々の白壁に弾痕をつけて飛び去って行く。こちらには対抗できる戦闘機もなかったようだ。

セミの声がからだ中の汗を呼び出しているような暑い日、例のように朝からグラマンがやって来たが、午後になって家の中の雰囲気がいつもと違っている。外もいやに静か、「どうかしたん」私の問いに母が「戦争が終わったよ」「ふうん、それで勝ったん？」

母はただ黙って小さく首を横に振りながら悲しそうな顔をしていた。東京にいる伯父の長男は海軍に入って、その時にはすでに帰らぬ人となっていたのだ。私の記憶に残る悪夢の半分がその日終わった。

ごはんと芋のつる

N・Tさん　73歳
摂津市千里丘

みんな食べた、ほめられた。食いしん坊学園のコマーシャルにこんなのがある。なんと平和な日本になったことだろう。四十年前のあの日、あの時お芋を二個食べたと言って柿の木にくくりつけられて折かんをうけた隣の子供がいたっけ。泣き叫ぶ子供の声をききつけてかけて行ったけれど、あの戦時中の食糧事情のきびしい折柄、あやまるにもあやまれずすごすごと引き返した自分の過去を思い出す。人のことどころか、自分の子供を五人も抱えて、一ヵ月の配給ですら満足に貰えないあの時のことを思い出しながら、今の幸せをしみじみ感謝しています。電波兵器の製造にたずさわっていた主人を、一人大垣の社宅に残し、子供五人を連れ主人の郷里の丹波に疎開しましたが、疎開のその日からが私達は生きた戦場でした。

主人の兄妹が、子供を、そして姑さんまで連れて帰って総勢二十二人の大家族でした。お釜五つを別々に炊かねばなりません。帰ったそのあくる日から食糧確保のための芋畑の開墾が始まりました。鍬を持ったこともなかった私は、豆のできた手をかばいながら、荒地の開墾に来る日も来る日も精を出し、夏の初めに芋づるを植え付けましたが、山道を水桶をかついで、水やりに行くときの苦しさ。大世帯ゆえ、それぞれ仕事の受け持ちが決まっておりましたので、いつも水やりは妹二人と私の役目でしたが、苦労して育てた芋が秋になって小さいながらも根をつけた時の喜びは、また一入（ひとしお）でした。それからしばらくは、私達総勢二十二人の食事をどれだけ助けてくれたことでしょう。でもこうなるまでにどれだけ苦しい毎日だったことか。あの赤土の中に汗の雫（しずく）と共に私ばかりじゃない、きっと皆の涙がしみこんでいたことでしょう。

ごはんの代わりに大豆粕を配給され、それも大豆粕ならまだしもトウモロコシの粕が配給されたこともたびたびでした。お芋と混ぜてごはんに炊き、または道端でとって来たヨモギと混ぜて団子にしたりしました。ある材料でいろいろ考えて作る食べ物ならまだしも、トウモロコシの粕の中に一合位のお米を入れ、それを六人で食べていましたが、主人の妹が「姉さん、そのごはんでは余りに可哀想だから、今日畑に出る前にこれを食べて出たら」と言って四、五割方、米の入ったごはんを一杯入れてくれました。

妹は京都市内で食堂を経営しておりましたので、丹波へ疎開するとき手持ちのお米をみんな持って来ていたと

かで割合困らぬ生活をしておりましたのでくれたのですが、雑草を混ぜた雑炊を食べて学校へ行った子供達のことを考えたら、どうしてごはんがノドを通りましょうか。私は里芋の葉っぱに急いで移し、ご馳走さまでしたと、お茶碗だけ返しました。四キロもある小学校からすき腹を抱えて帰って来た三人の子供に、妹に貰ったごはんを分けてやりながら、私の飲みこんだ物は熱い涙の雫のみでした。大切に持っていた着物もつぎつぎと食糧品と交換され、残る物は絹物の二、三枚だけになりました。農村のこととて仕事着になる木綿物が喜ばれ、都会育ちの私など木綿物がないので何事につけても不利でした。

私は夜遅く手元にあった八番線を持って、少し離れた百姓のおじいさんの家に行き、おかゆの中に入れる水菜と取りかえてくださるように頼みに行きました。八番線は玄米を供出する時、俵をしめるのになくてはならない物だと言うことを前に聞いたことがありますので持って行ったのですが、おじいさんは提燈をつけて畑に下り「あんたも苦労するなあ」と言いながら水菜を切ってくれました。

提燈の光に照らされたおじいさんの横顔が今でも目に残っております。幾株ということは忘れましたが、「子供さんたちを連れてつらかろう」と言って、幾株かの水菜と大根まで抜いてくださったことも忘れられません。あのおじいさんが今でも生きておられたら、一度お礼を申し上げたいと思いますが、戦後四十年、あの時でさえ大分のお歳でしたので今ではもう生きてはおられないでしょう。

それぞれ子供連れのことゆえ、「自分の子供は自分で」との主義でそれ相当の苦労があったことと思います。畑に行って芋を掘り、モンペで芋の土を拭いて子供に与えたあの生の芋の有難かったこと、芋のつるは申すにおよばずジャガ芋のつるまで茹(ゆ)で、食料にしましたが、ジャガ芋のつるだけはどうしても食べることはできませんでした。ノドがいがらくて吐気を催し、いくらのみ込もうとしても、のみ込むことはできません。今でも白い花をつけたジャガ芋の茎を見るたびに、苦しさとなつかしさで胸が熱くなります。

主人は電波兵器の製造にたずさわっているため、出征軍人として召集されることも免除され、ただひたすらに兵器の製造に専念しておりました。「知らせがなかったら元気でいると思え」との便りがときどき届くのみで、行くことも来ることもできず、ただ主人の無事と会社の兵器製造が無事であるようと祈るのみでした。名古屋が近いためと電波兵器を製造しているため、

何回となく敵の攻撃をうけたことでしょう。私はラジオを聞きながら、ただただ離れて暮らす人のみの知る心配を味わい、早く平和の日の来ることのみ祈りました。

妹達の炊くごはんの釜肌に残ったごはん粒を一粒ずつ拾って食べている幼ない子供の指さきを眺めながら、いくど涙したことでしょう。上の子は三年生、学校で教えられた通り「辛抱しましょう勝つまでは」と言って下の子供達をさとしていました。世間の人達はみんな苦しんでいる。私達だけではないと思いながらも「なぜこのような戦争を」と、悲しく思ったことも幾度あったことか、でも出征兵士の家族のかたがたや、戦死なさった家族のかたがたのことを思えば、まだまだ子供達と一緒に暮らせることは幸せだと、山に入ってアカザの葉っぱや野草摘みに精を出しました。朝から晩まで摘んだヨモギはトオモロコシの粕を混ぜての主食になりました。

村の公会堂に疎開した京都の国民学校の児童がひもじさの余り、落ちた渋柿の実を拾って食べ腹痛を起こしたと言うことを聞いたのもこの頃です。幼い児童が母恋しさに、毎晩泣いているということをきいて、うちの子供達は「僕たち母ちゃんと一緒だから幸せだね」と喜んでおりました。戦争はもう嫌、戦後もまたあまた苦しみました。今こそ世界を挙げて、戦争の噂を早く消してしまいたいものです。

子供の目で見た終戦

K・Iさん　48歳
摂津市鶴野

私が終戦を迎えたのは小学校の二年生だった。幸い京都に住んでいたので恐しい体験はないが、子供の目で見た戦中・戦後の記憶をたどってみた。小学校に入学した頃、戦局は厳しく、空襲警報が鳴ると授業を中断し、防空頭巾をかぶり先生について地下のボイラー室に逃げた。そこは暗くジメジメしていてあわてるとツルリところんだ。それでも泣く子はいず、一言も口にせず、ジッと息をころして警報が解除されるのを待っていた。男の子はやせて青バナをたらし、服の袖には鼻汁がテカテカに光っていた。女の子は髪にシラミがわいた。学校から帰ると母がクシで髪をすいてくれるが、ひろげた新聞紙に黒いシラミがパラパラと落ち、それを爪でつぶした。体にもわき、シャツの縫目に入り込んだ白いシラミを探し、つぶすのが日課だった。

夜は暗幕を張り、電灯の傘にも黒い布をおおい、うす暗い明りの下でラジオのニュースを聞き、B29の飛ぶ音にふるえ、飛び去るとホッとした。私の家は呉服屋をしていたが、店は閉めていて衣類の配給の日だけ開けると、店の前にはチケットを持った人が並んでいた。店の下に防空壕を掘り高価な絹物をしまったところ、水が沸き出てどれもシミになってしまい、母はなげき悲しんだ。

京都は歴史が古く寺院が沢山あるので、爆撃されることはないという噂が入り、大阪が爆撃に遭い沢山の人が死んだと聞かされても、それほど緊迫していなかった。集団疎開を勧める手紙が来たときも、死ぬときは親子一緒でという母の言葉で参加しなかった。玉音放送のあった日、ラジオの前に集まって大人達は緊張して聞き、終わると声をあげて誰れもが泣き出した。私は天皇のお言葉が理解できなくて、それでもその場の雰囲気で「ああ戦争に負けたのだ」と悲しいというより解放感を味わったように思った。

私の住んでいた町は陸軍の兵舎が三つもあって家の前の道路は師団街道と呼ばれ、戦時中は兵隊さんの行進や軍人さんをよく見かけた。

戦後いち早く米軍がやって来て、大人達は戦争に負けたのだから何をされるか解らない、特に若い娘は外に出てはいけないと、どの家も戸をピタリと閉めていた。それまでアメリカ人を見たことがなかったので、こわごわ二階のガラス戸をソッと開け米軍の行進をみた。まず背の高いのに驚き、金髪と黒人に驚いた。それからまもなく、町にはパンパンと言われる若い娘さんで

あふれ、それまで手に入らなかった化粧石ケン、外国タバコ、チョコレート、ガム等を欲しいためにどの家も二階を彼女達に貸した。

戦時中の暗い街は一変して華かな街に変わり、バー、キャバレーができ、米兵は陽気で親切だった。店を再開すると、貴族だった人達が収入の道がなくなり、着物をつぎつぎと手放し店に持って来たので一時期、古着が並ぶようになった。母は街の女の面倒をみたり相談相手になってあげたりしたので彼女達に慕われ、子供の私は可愛がってもらえた。とくにチズちゃんという人が母を慕い、相手のダニさんという米兵は子供好きだったのか、とても可愛がってくれた。大きな身体で軽がると抱き上げ顔中、キスをするのだった。ダニさんがキャンプから出られない日が続いた。チズちゃんはキャンプまでお金をもらいに行きたいが、夜ＭＰに怪しまれないように行かなくてはならず、一緒に行ってほしいと頼みに来た。母は私も連れて行った。あたりは真っ暗で草むらの中に身をひそめ、ダニさんの来るのを待った。

ときどきサーチライトに照らされ、そのたびに身体を地面に伏せ、まるで自分が悪いことをしているように怖くて、ドキドキした。ダニさんがこっそりやって来て、お金と紙袋を渡して帰って行った。チズちゃんは紙袋の中から丸い缶に入ったチョコレートをくれた。小さなチョコレートが色とりどりの紙に包んであって食べるのがおしいようで、毎日少しづつ食べたのだった。彼女等が一番おそれていたのは売春婦狩りで、夜ＭＰがトラックで乗りつけ、どの家も土足で上って来て彼女等を見つけると連れて行くのだった。チズちゃんは私の家にハダシで逃げてきて、トイレにかくれたが見つかりトラックに乗せられ連れて行かれた。連れて行かれた先は平安病院（彼女等を収容する専門の病院）なので、母と二人で面会に行った。塀の上には鉄条網が敷かれていて異様な雰囲気だった。チズちゃんは母を見るなりワァッと泣き出し、泣きながら語るところによると性病の検診で検診台に上ってフト医者を見ると、その人は初恋の人で、あまりの驚きと、恥かしさで検診台からころげ落ちたそうだ。

私はまだもう一つ理解できないながらもチズちゃんが哀れだった。

まもなく米兵が横須賀に移り、それに連れて彼女等もいなくなり、キャバレーやバーも閉店した。チズちゃんは母に別れを告げてダニさんについて横須賀に行った。それっきりでチズちゃんのその後のことは判らない。米軍キャンプの後には学校や市営住宅ができて、街は米兵や彼女達がいたことなど忘れ

たように平和で静かになった。私自身も大人へと成長していった。

今この平和な生活の中で、子供時代の思い出だけでなく、戦争の恐ろしさは経験していなくても、戦争だけは決してやってはいけないと思う。この平和な時代がいつまでもつづきますようにと願ってやまない。

千人針

O・Hさん　68歳
摂津市香露園

昭和十六年七月、暑い日でした。お産を控えた折、突然の召集で、尾道から里の母が「一日でも早く家に帰れ」と言ってきました。世帯道具の片付けもそこそこに吹田から電車で大阪から急行列車で尾道の里に帰りました。

私は千人針等お願いして歩くこともできませんでしたが、夫は二十一年五月南方から復員した時、ちゃんと身につけて帰りました。本当に有難いことだと思っております。

夫は広島から満州、南方方面へ廻されたらしいのです。南方からは通信も途絶え、内地は空襲空襲で大きい都市から次々と焼き尽くされ、衣食住はだんだん苦しくなるばかりでした。二十年八月十五日終戦、空襲はなくなり、夜ゆっくり休めるようになりました。

綿毛の衣料品が高価となる一方で、食糧はますます苦しくなりました。

物々交換など、今の世の中ではとても考えられません。

軍人も近い所から早く家に返され、南方からは船が無く、何時復員できるか知れませんでしたが、アメリカの船で送り返されたとのことで二十一年五月、名古屋へ帰還したようです。しばらくして元の職場に勤めまして、家が大阪では無かったので、私と長男はその年の八月大阪へ出ました。見渡す限りの焼野原で、家のない方が大阪駅の下で生活しておられました。

大阪の生活は尚一層食糧難でしたが、何とか頑張りました。そのうちにアメリカの食糧補充を受けて、米の不足を代用食でやっていきました。

また何年か過ぎた頃、戦いの痛手から立ち直り、考えられない程に恵まれた世の中となりました。あれだけ大きな戦争を体験した私などはもったいなくて、やたらと物を捨てる事ができません。

戦争の傷痕

E・Nさん　59歳
摂津市一津屋

青年期の心境と生活

戦国日本、当時の国民思想は否応なく軍政路線に追いやられ、あきらめが先にたち、青年の意欲は単に心のよりどころ程度だった。物資も金も体力も尽き果てての終戦である。ただ国敗れて山河なしの標語だけが妙に気がかりの日が続いた。

朝星夜星を仰いで軍需生産に励み、得た給与は隣組で各町内ごとに半強制的に割り当てられた国債の費用となった。その国債が後に何の魅力もない紙屑同様になったのは政府が給与を合法的に強奪したことにしかならない。しかし金が有っても買う物自体が無い。誰もが絶えず空腹だった。当時私は九州の福岡市にいたのだが、ある時、街に行列ができた。一皿のソラ豆の塩煮を食べたいのだが、どの辺かで売り切れた。家庭の食糧事情は極端にひっ迫している。僅かな米麦と抱き合わせの大半が大豆の絞り粕で主食配給とされていて、なかなか食えるものではないが空腹では生きられない。そのため、いつも下痢状態だった。その頃は縫糸も衣料品も配給切符制であり、衣料品とて不充分だが求め過ぎては縫糸にさえ困る。靴下の繕いが丸い裸電球を中に入れるとうまくできた。祖母は古い長袖のシャツの袖を切って、その切口を袋状に閉じ靴下にしてくれた。廃物はまるでない。リサイクル生活は人の不自由から生まれ、今も私はそれを得意としているので人は器用と言うが、断じて器用なんて言葉には抵抗を憶える。戦中談話は断片的に似た話が現代人に語り継がれているだろう。それにつけても人は逆境に強い。それなりの希望を持ちつづけた。これが当然軍政の望むところだった。

軍事行政

この時期は徹底して英語は敵国語で使用禁止。学業から除去され、女子のヘアーもパーマは禁止。毎日耳に入るサイレンといやでも目につく貼紙は軍事標語ばかり。もう軍事一色で教育の何たるかも失われ勝ちだ。ある田舎で一人の青年が召集令状を受けたが、老母と二人暮らしの農家である。残る老母が気がかりで召集に応じなかった。間もなく騎馬憲兵がやって来て、山中に逃げ込んだ青年を拳銃で射殺して行った。当時有名な話だったが悲しい話である。この頃、憲兵は特権をもっていて恐れられていた。

子供達の教育も徹底している。宿命的にあきらめを旨とした日本人古来の

慣習を美徳として、積極的にその志向に走らせた感じがする。これを道義とした国民を軍政統括することは容易だった。勿論こうした時局柄とは全く逆な思想の一握りの潔い者達がいて今も名を残している。特に私が勤務した筑紫市の軍需工場のすぐ近くで起きた事件に、中野正剛氏の割腹自決があった。この反体制思想のメンバーは中野正剛会を結成し、軍事色のカーキー色をきらい、その服装も黒づくめに徹していた。軍事思想を植えつけられた私達には、単に異例分子にしか思えなかった。そのくせ今思えば福沢諭吉の書物を持っていたのが恐ろしく思えた。おりから軍需工場に副社長の弟と名乗り、山本五十六元帥（当時中将、戦死後特進）が南方への出発を前に激励の訓示に来社したが、この方が素直に私達には受け入れられた。その後、一時期私も軍籍に身を置く事になる。

教育と徴兵

地域有名小学校の秀才組から幼年学校へと進路があり、職業軍人の進級最短コースがあった。巷は志願兵募集の広告でいっぱいだ。学校でも志願兵募集の講演が再三あった。高等小学（現在の中学二年）卒以下は一般兵志願、その他、中、高、専、大卒それぞれ幹部速進の志願コースがあり、当時一般人の三分の一が中等教育以上を修めた程度の中にいた私だが、早々から職業軍人として志願するのは、つまりは死に急ぎにつながり、その気になれなかった。数え二十才で徴兵検査を受けるのがわれらが思春期に残る出来事だ。検査場には地元の二日市市の婦人会主婦連が白タスキで検査官の接待をする。

その数は余りに多く、中には何もせず手もち無沙汰の人もいる。その広い学校の講堂で、私達は全員一糸まとわぬ素ッ裸になり、婦人等に対面の形の整列で検査を受ける。思わず局部を手でカバーしようものなら大変な怒声が走る。しかも一人ずつその局部をひねくって検査するのだから、紅顔の美少年も形なしである。

ちなみに、同年配の異性とは言葉さえ交せなかった時代であり、姉と外出するときなど、一定の隔りをもって歩いたものである。検査が甲種となれば召集令状が来るのは時間の問題である。あわてて特別幹部候補生の試験に受験し合格したが、すでに遅く、現役の一般兵入隊が先に来て、志願先入隊の期日まで熊本市にて預り兵とされた。ところが終戦が先に来てしまい、短期間の一般兵経験をしたにすぎない結果になった。だがその時同時に入隊した一般兵は入隊と同時に中等以上の教育を受けた者とそうでない者とが二分され、三分の二は一般兵として編成された。軍装は上から下まで新品づくめの正装

をしたが、もう腰の剣もサヤは竹製で、帯革（外装ベルト）はズック製になっていた。とは言え、残存隊の私達はまたくびっくり。ズボンは大正時代の黄色の帯線のついたもの。靴は十文三分と十文五分の組み合せで支給された。

約半月位してからか、誰からともなく、先の同時入隊の新編成組は鹿児島から沖縄へ向け出航してそのまま船ごと全員死亡と聞いた。誰が死んでも自分だけは生きのびようと思うのが人情。全く幸運な自分を神に念じた。でも志願先への入隊期日を前に終戦を迎えた。

少年期の思い出

話はさかのぼるが、熊本市における中学時代、すでに物資不足の時期に有った。代用の布靴の日常。ある日の軍事教練の時間、分列行進中のことである。靴底半分がはがれ、みるみる前半分の底がなくなり素足となり、靴のつま先が一歩毎パクパクとなった。同僚の笑いに、それと気づいた教官は一人私を隊列からはずした。そのみじめさは子供心に辛らつだった。良い靴など求め得ぬ家計からして起こるべくして起きた。燃料統制で銭湯経営が出来なくなった父は借金苦に身を隠し、祖母は叔母の家へ世話になり、残った母子四人暮らしはギリギリの生活だった。下宿人と内職とで一家を支える母の苦労は目に余る。この頃は一升の米を買うのに、子供が使いでは売ってくれなかった。ラジオさえまばらな当時、夜十一時はもう寝ている時刻。それなのにまだ明朝の米が入手できない。再び朝になって店の戸を叩き、不気嫌な店主に台湾米を求め、一升の米を新聞袋に入れ大事に抱いて家へ急ぐ途中、同僚が登校してゆく。「何だまだ学校行かんのか、遅れるぞ」と言い残して行きちがう。わけもなく止めどもない涙が溢れ出て仕方がない。学校どころか、いまやっと米を手にしたところだ。服の袖で涙を拭き、母に顔を見せなかった。

母はその私の気持ちを知ってか知らずか、微かに叱咤する言葉を耳にした。昼食のパンを買うため何がしかの金を貰い、朝食ぬきで四キロの登校路を走りに走った。

切実な一般家庭

戦争末期には私は福岡市にいたのだが、そのころはどこの一般家庭でも必死で食糧確保に努めた。家族五人の配給分で五人が凌ぐより、六人分で六人が凌ぐ方が理の自然、一人軍需工場に食糧籍を置き、三食特配付の日を送っていた私に、その頃は家に帰っていた父に「苦しい時は一緒だ」と言われ、特配のあった工場の食糧籍を一般家庭

の自宅へ移した。代用食生活に入り、会社は残業・徹夜の連続。栄養不足と過労で遂にダウン。丸二日間、出勤先を近くの公園に変え芝生の上で眠り続けた。何が嫌でも不満でもない。体がだるくて動けない。今日のようにドリンクや強壮剤なんてものは何もない時代。公園の水で額を冷やし水を飲みただ眠った。もう体が動かない。どうなっても仕方がない。どうでもいいや、無断欠勤二日で何とか切りぬけた。もう一日欠勤すれば家に憲兵が来るはずである。軍需工場は軍が直接介入する。工場の食堂で作業帽を被っていた者が、帽子を叩き落とされたのを見た。食事中さえ巡回監視された。

この文中に私だけしか分っていない幾つかの問題があるが、これを読者がどう理解するだろう。愚かな出来事とは受け取って欲しくない。封建時代の本当の姿が底流にあり、こうあるのが日本の美徳観念と言うより当然とされた国情だった。今日、好きな事の表現も行動も全く自由に等しい時、実感としてどの程度納得できるだろう。戦争とは勝敗何れの側にしても、如何に自滅に等しく壮絶で悲惨なものか。一個の弾丸の怖さより毎日の飢えの苦しみはもう御免である。略奪立国を今日の日本に変えた現代人は、立派に一大偉業を成し遂げたのだが、治にいて乱を忘れないで欲しいものである。それにつけてもアフリカの飢えた人びとを想う時、戦時中の日本を連想せざるを得ない。今の日本の平和は戦争中と等しい努力によって支えられているように思われる。いま日本人であることをしみじみ幸せに感じている私達。戦時中はなぜ日本なんかに生存しているのか、と思ったことがたびたびあった。今はウソ見たいに思える私である。

我が苦難時代

元来、自分が人に話す場合、相手がどう感じてくれるかその方が先になる。特に今からすれば想像もおよばないような昔話をどこまで信じてくれるかと多少不安である。とにかく期待するのが読者か自分か分からぬままに進めてみる。戦中戦後の実情はその表現の比ではない。昭和の戦後史とか格好の良いタイトルも知ってはいるが、その悲惨さは物・物・物につきる。

終戦、その日から開戦である。敗戦して山河がどうであろうと、いま何か食いたい。これは郷里の熊本での話だが、家族に食わさにゃならん、食糧入手に警察との大立回り等、いまはいない親達がずいぶん苦労したものだ。親に連れだっての思い出が当時苦しかっただけに、今は楽しい思い出でもある。意外とそんなことが人の幸せを感じる今日ではある。電力不足でまともに送

電がなかった時代のこと、丸い裸電球の中の発光体が大きなら旋のタングステンであり、これがローソク送電という微量送電になると、丸で電熱線のニクロム線のように赤く発色するだけで、まず部屋の照明にはほど遠い。送電さえそんな時期のこと、現在の電気製品なんぞ皆無である。もちろん蛍光灯なんてごく最近の産物と言える。まあラジオはあるにあったが、それさえ、短波のラジオは軍の牒報上接収されて残る数は少なかった。その上、ローソク送電となると聞こえなくなる。

一般には乏しい資源の中、小皿の菜種油に布紐をたらして灯りにした。新聞さえまともに読める明るさではなかった。マッチにしても火薬の資源として軍用に使われ、その代わりとして硫黄が塗られた「ツケ木」と称するものが出回った。松の薄板を小割りにして、火種から取り火して炎にするものである。火種の木炭も量的に限られているため、普通にはカラケシ等を多く使用した。カラケシは薪の燃え残りのオキをフタ付素焼の壺で密閉して消しズミにする。これがカラケシである。食料油も乏しい。これも蝋に似た代用油であった。冷めると真白くなり、食べられないから温い間に食べねばならない。そんなだから石ケンなどは、当然不足する。その代用に各家庭では、カマドの木灰をバケツに取り、水を注ぎ、その上澄みを洗濯に使用した。つまり灰のアクを利用したわけである。またタバコにまつわる話が残っている。

当時の配給タバコは「金鵄（きんし）」と言い、細巻きが一日四本位だったか、それと抱き合わせに刻みタバコそのものがあり、「のぞみ」と言い手巻きで吸った。その刻みタバコを各家庭では紙テープの端を固定し、一端を細筆のようなものでロールして上手に巻いたものである。それにつけても、タバコ不足を桑の葉、イチヂクの葉等を乾して代用タバコにしたが、満足できるものはなかった。

そんな頃、街中では暫く、「モク拾い」と呼ばれる人たちが道路の吸殻を集め、それをほぐして集め再製し、闇のタバコとして売買していたものである。

話はつきるところを知らない。全くと言えるほど何も物のなかった時期なのに、あるところにはあるもので、敗戦となるとどこからともなくゾクゾクと姿を現わし始めた。だがそうなると流通する金が問題になる。物はあるがその価格は日毎にはね上がり、果てはとんでもない値段をつけて当然として売り出している。そこまでくると世の中、金の問題、たちまちインフレとなった。一方で犯罪も続発する。日々の生活は一瞬のゆだんも許さない。欲しい物が見当らない。物がないのではない。値段次第でどうにでもなるわけで

ある。安いサラリーマン生活はなかなか苦しい。

思えば当時メチルアルコール（これは航空燃料）が流通し、私も同窓会で飲まされ、ひっくりかえったことがある。しかし、一般にそれが出回り、失明者がかなり出て新聞を騒がせた。かたや密造酒（ドブロクを蒸留して）に味付けのため、ダイナマイトやネコイラズを微量だが混入し、取締りを避けるため水枕に詰めて運んでいた。これは糖分の代用であるが、後にズルチンとかサッカリンが出回り、遂にはシソ糖と呼ぶものも生まれた。

この頃になると、街の人達は物々交換でずいぶんぜいたくな物を食糧と取引きした。ある日、配給品以外に闇物資をこばみ続けた大学教授一家が栄養失調死したのを新聞は報じた。闇物資の善悪を問う以前に生命がかかっている。それを取り締まる立場の人には、自給分物資か闇商人の物資か、厳密な区別はできなかろう。まして取締官自体、配給分だけで生きられる訳はないのである。国鉄の列車は人と物でギュウギュウ詰め。窓からの乗降は当然のこと。網棚さえ物と人で占められている。

運び屋で生活を立てている人達は、駅毎に警察官との鬼ゴッコになる。取締りの情報も口コミで速い。一瞬の雰囲気が冷風を呼ぶ。目的駅に停車直前の徐行中に降り口と反対側に出迎えの人を待たせ、物を落す人。物と共に自ら飛び降りる人。そのたぐいの私の知人が両手両足を列車にとばされながら、九死に一生を得た。今どうしているか、時には思い出すこともある。ちなみにその人は女性である。戦後強くなったのは女性と靴下と笑えるだろか。女性はそれだけ純粋である。

こんなざわめきの中、日増しにインフレは昂じ、政府は遂に平価切替えに踏み切った。このことはある程度、予想されたことであったので、金のある人は物に替えようと大わらわであった。だがそうなると売る側もそうはいかない。少々高くても無知な人や情報の遅れている所から物を探した。だが、困ったのは同じ物と言っても不動産を抱えた旧地主連である。身内の一人一人名儀の山林に分けたりしても限りがあった。もちろんこれが政府の方針であるのだから仕方はない。何月何日をもって新円とする。その臨時新円は二十円が限度で、二十円分のシールが隣保組を通じ配られ、旧紙幣はこのシール分だけしか通用しなくなった。つまり現金はこれだけで全国民がスタートした。私はこれをもって新しい赴任地へ向い、岡山駅のベンチで握り飯を浮浪者にねだられた。立って見ていられては

食べられるものではない。それは大変な時代であった。

うん婆の一人芝居

S・Aさん　54歳

摂津市香露園

おお寒うなったのう。今日は坊が眠るまでのあいだ、ちょっと、うん婆の話でもしようかいのう。昔、昔のその昔の話じゃとて聞いてろ。うん婆が大阪市から摂津へ疎開した頃の話じゃ。昭和十六年には太平洋戦争とかで日本の国中の男がみんな戦場へ狩り出されてしもうた。「老いも若きも」「強きも弱きも」じゃ。もう内地には、ほとんど男けは、のうなってしもうとる。丁度うん婆が少女の頃じゃった。「紀元は二千六百年」の歌や「昭和、昭和、昭和の子ども」の歌が流行ってのう。うん婆もよう歌うた。今なお覚えとるで。うん婆の母さんはのう、病弱で体の調子が悪うて病床から離れてしもうたのじゃった。うん婆は国民学校から授業を終えて帰ると、いつも寝床の裾からもぐり込んで勉強し、宿題をしたもんじゃ。ほら、さっき歌ったうたがあろうが。大きい声で歌とうては子供ながらに戦勝気分に得意気じゃった。

病気の母さんを喜ばせようとてなぁ。喜び笑顔をつくる母さんを見とうてなぁ。母さんもいつしか覚えてしもうては、力弱いが一緒にも歌うてくれたもんじゃ。ところが、昭和十五年五月、突然母さんは、うん婆たち四人の幼い女っ子を残して昇天してしもうた。うん婆はこの大事を知りかねて、よう葬儀に来てくれる客のにぎわいに大喜び、はしゃいでおったそうな。

この頃からぼちぼち日本の戦争の旗色も悪う成りよってのう。灯火管制がきびしゅうなり防空訓練をさせられてのう。夜は電気をつけにくうて黒い暗幕の下で、こっそり勉強したもんじゃ。姉妹のうち一番あほうなうん婆は、それでも一生懸命勉強して望みの大阪市内の女学校へも入学がかのうた。じゃがなあ、どうじゃ、勉強はおろか女学校のなかがすっかり工場に変えられてしもうた。うん婆たちはのう、学徒動員とかで日がな一日ミシン掛けの女工さんに早変わりじゃ。うん婆は毎日毎日、持ち分の作業服を仕上げたもんじゃった。

戦局は日増しにきびしゅうなって、内地は空襲々々の爆撃で逃げ場ものうて、あたり一面火の海、焼け野原に化してしもうたもんじゃ。うん婆の大阪の家も店もこの時焼けてしもうて、今じゃもうなんにもありよらん。学校はといえばのう、校内工場じゃ、らちあかんのか。郊外にある軍需工場へ回されてのう、油とスパナを握って「トラック野郎」よろしくエンジン掃除をするのじゃ。心臓部にあたるピストンを

なあ、この油よごれしたどろどろをガソリンで洗うと美しゅうなるのじゃ。ピストンのひややかな美しさは見事なものじゃと感じると同時に、うん婆はその仕事が気に入ってのう。特にエンジンの分解と組立作業をする時は我を忘れて頑張っとった。兵隊さんに、進君進君と気に入られてのう。乙女心も手伝ってかいのう。楽しい日々じゃった。戦争中とは思えなんだ位、幸せいっぱいじゃったのう。

いよいよ飛行機がなく爆弾が足りなくなってきよったらしく、こんどは気球爆弾作りじゃとて、うん婆たち乙女部隊は特殊なのりと紙で一生懸命に気球を作ったのじゃ。軍属の兵隊さんのきびしい監視のもとにのう。絶対の秘密厳守でのう。こんな日々の明け暮れのとき、昭和二十年八月十五日突然の終戦じゃ。敗戦の報に皆んな涙しよった。学生は即時帰宅せよの命令が出るやいなや帰らなならん。電車は動いとらんでのう。遠い道のりを歩いて帰るんぞ。びっくりしたが、しかたない。線路の上を枕木またいで歩いたでのう。

「ぐずぐずしよると米兵がすぐ上陸してくるぞ。女、子供は気をつけろ」のデマに迷わせられながら、泣き泣き友と手をとり合って歩いた歩いた。しかし、淀川の鉄橋の上を越えるのは、さすが恐ろしゅうて足が前に出なんじゃったで。はいつくばってどうして渡り切ったか覚えとらん。神に祈り、母さんの面影に必死じゃったことだけが、今脳裏にひらめくだけじゃ。おかげでラジオ放送された天皇陛下の終戦の言葉が聞けなんだことが残念じゃったのう。

次は、さあダビの火の思い出じゃがのう、昭和十九年八月三日のことじゃ。丁度終戦の一年前のことじゃ。うん婆の父さんが持病の胃潰瘍で昇天したがのう。坊の大じいちゃまじゃ。小柄で病身者じゃったから、戦争にも軍属にも召されなんだ。うん婆にはとっても厳しい恐い父親じゃった。親戚の叔父たちはこの父さんのことを「全身これ頭脳の火の玉じゃ」と渾名(あだな)したとかさ。それ程に目先のきいた人らしかった。しかし、母さんが先立ってしもうて、その淋しさは娘達には理解できなんだのう。薬ものうなり医者もいなくなり、助かる者も助からんで死んでゆく時代じゃ。

さすがの父さんもつらかったろうよなあ。でも、坊の大じいは最後の最後迄しっかりしとったでのう、まっさか死ぬとは思うとらんだったでのう、それがもの言えぬ人となった時の悲しみは、娘のうん婆には耐えがたかった。母さんの死なれた時とは、又ちごうた淋しさが身にしみたもんなあ。当時は火葬でのう。それに薪が少のうて燃え切らんと……。その上空襲にでもなれ

ば目も当てられん始末じゃったそうな。心配させられたが運よう警戒警報も出ずになあ。それでも気掛かりで、帰宅しても、はるか山手の方を見ては煙の色を心配しとった。翌日、骨あげに行くと、父さんの金歯が焼けてにぶい銅色に変色してポツンとあった。これを大切に持ち帰り仏壇にしもうとった。昔は「金」類はすべて献納か没収されたでのう。うん婆が結婚する昭和三十二年三月、父さんの歯を再生してリングにしてもろうたのじゃ。父さんの歯がうん婆の指にささっとるのじゃ。嬉しかったのう。

父さんの唯一の形見じゃでのう、うん婆のこの指をみろ。立派じゃろう。どんなダイヤよりも立派じゃぞ。

坊には、こんな話ちいっとも面白ろうなかったろうが、よう辛抱して聞いとくれじゃった。うん婆にとっては、一生一度の重大な出来事ばかりじゃでのう。うん婆のたった一人の娘っ子と、たった一人の孫っ子坊に聞かせておきたかったのじゃ。よう覚えとくんぞ。悲しみ泣いて苦しみ泣いて何度死のうと思いよったか。しかし頑張ってここまで来たのじゃ。うん婆の半世紀じゃでのう。職業婦人に徹してやっと、昭和六十年一月八日勤続二十年を手にすることもできた。うん婆もこれからは泣くまいぞ。次は二十一世紀へ向けて、たゆまず一人歩きじゃ。うん婆のことは心配するな。うん婆はのう「戦争と平和」そして「平等」とは何かをもう少し勉強してみたいのでなあ……。坊の成長を静かに夢みながらのう……。

空襲と戦災―戦争中の日記より―

Ｈ・Ｙさん　58歳
摂津市正雀本町

はじめに

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争勃発。多大の犠牲を払って、やっと終戦（昭和二十年八月十五日）を迎える。

そして、尊い平和切符を手にして早くも四十年を経過。だが最近の新聞紙上によれば「防衛費一％突破も」なぜか、しのびよる軍靴の足音が、そこまで来ているように思えてならない。絶対に戦争を起こしてはならない。只々、世界平和を祈るのみ。

戦争中の日記より

昭和二十年六月十四日（木）晴。当時十八歳の私は、大阪北部のＴ電機に勤務していた。幸い工場の敷地が大きく、遊休地を利用して社員一同が菜園をつくり、食糧難の時代、大いに助かった。収穫した大根を持って我が家（大阪市東成区東小橋北之町〇〇〇〇）へ。環状線、玉造駅下車。帰ってから、父といろいろ話をするが、いつになく今日は次々と話に花が咲いて長話になる。妹に促されて会社の寮に帰る。（寮生活をしていた友達のところで泊まっていた）

昭和二十年六月十五日（金）曇。朝八時すぎ空襲警報発令。二十分後、大阪城東南並びに東方面投弾の情報あり。その直後には煙がモクモクと上がる。京阪神の鉄道沿線にも投弾。来襲の敵機三百機以上。空は煙と砂塵で、墨を流したように暗くなり、正午近くまで夜を思わせる程であった。次々と投下される油脂焼夷弾は、ザーと砂をふるい落したかのような音をたて、その間を縫って爆弾がドカン、ドカンと大音響。もう生きた心地がしない。幸い会社は無事。午後二時半、全社員退社す。

交通機関は全面的にストップ。止むなく徒歩にて、我が家は如何やと案じつつ急ぎ帰途につく。道中、空爆された家々の焼跡からは、残り火が軒並みにメラメラと赤い舌を出して燃えていた。やっと家に辿りつく手前で、友達に会い、我が家が全焼していることを聞く。今まで人ごとのように聞いていた戦災も、容赦なく我が家をも火焔に包んでしまったのだ。すぐ罹災者収容所である小学校へと急ぐ。気が滅入っている上に、断水、停電の二重、三重のパンチ。暗いわびしい教室で、焼跡からチロチロと燃える火を見ながら無事だった父と妹と共に一夜を明かす。昨、十四日夜、虫の知らせか父と歓談したのが、愛する我が家との訣別だったのだ。感無量。

六月十六日（土）晴。今日は焼跡の掘出しにいく。防空壕に入れてあった

布団、タライは焼失。他の物は煙で、くすぶっていたが助かる。

六月十七日（日）晴。今日も焼跡の整理にいく。

六月十八日（月）晴。罹災四日目になると収容所の待遇も悪くなってきた。

六月十九日（火）晴。夜十一時、情報が入り静岡、浜松方面を空襲。

六月二十日（水）晴。家を失ったので上司に頼んであった入寮が、許可され入寮す。

六月二十一日（木）焼け残った物品を荷車に積んで、夜十時、父と一緒に焼跡を後にして疎開先の摂津市別府へと歩み出す。長柄橋南詰まで来れば空襲警報発令。急ぎ橋上を渡る。半ばまで来ると、過日の爆撃で破損した大穴が各所にあり、危険極りない。油断すれば荷車もろとも飲み込まれそうだった。警報解除になった途端、今までの緊張感がなくなり一ぺんに睡魔が襲う。淀川の堤防上で仮眠のため一休みするが、蚊の大群に襲われて仮眠も、ままならず発進。うつら、うつらと荷車に寄りかかりながら、午前四時、やっと辿り着く。

六月二十二日（金）晴。夜八時三十分、空襲警報発令。主として中国地方及び明石、姫路方面、広島、呉等、各地に亘って来襲。その機数六十機なり。解除は午前零時になっていた。警報が出る度に、会社へ急行して護る任務があった。

六月二十三日（土）晴後雨。
六月二十四日（日）雨後曇。
警報なし。

六月二十五日（月）晴。会社の宿直。蚊と蚤と空襲で少しも眠れなかった。

六月二十六日（火）曇。朝八時頃、空襲警報発令。ウン、ウン、ウンと、唸り声を立てながら今日も又やってきた。敵B29は重爆撃機を主力にして、本土を情け容赦なく襲う。近畿、中国、四国並びに東海軍監区に亘る広範囲だ。主に爆弾投下。近畿地区だけで百機来襲。大阪市内各所も被害。十一時になってやっと解除。夜は十一時に警戒警報発令。敵編隊は大挙して名古屋方面来襲。

六月二十七日（水）晴。警報なし。

六月二十八日（木）晴。午前零時、警戒警報発令。同一時二十分解除。

六月二十九日（金）午前二時十八分警報。敵機は大挙、備前岡山を襲う。同四時十五分解除。朝まで少しも眠られず眠い。

六月三十日（土）小雨。
七月一日（日）曇後雨。
七月二日（月）晴。
七月三日（火）晴。朝から蒸せかえる程の暑さだ。公休日を利用して、奈良県の榛原（はいばら）方面へ学童疎開している下の妹のところへ半年ぶりに面会に行く。真ッ黒に日焼けして、懐かしく、「兄
珍しく三日間警報なし。

ちゃん」と呼んで、へばりつく。そのいとおしさは忘れられない思いだ。いろいろ話をして四時、駅まで送ってくる。「元気でなあ」と別れ、車中の人となる。夜十一時五十分空襲警報発令。翌四日、午前三時半解除。主に姫路を襲う。

七月四日（水）晴。警報なし。

七月五日（木）晴。午前一時四十五分より午後六時迄、六回も警戒警報発令される。

七月六日（金）晴後雷雨。警報なし。

七月七日～十四日迄、日記帳に記入なし。

七月十五日（日）午後零時半、空襲警報発令。小型機、主力は東海軍監区へ。夜に入って又々、空襲警報発令。

七月十六日（月）晴。敵機は大型、小型で来襲。連日連夜だ。

七月十七日（火）雨。中部情報が入るが、敵機は大阪には入らなかった。

七月十八日（水）警報なし。

七月十九日（木）午後十一時三十分空襲警報発令。主力は福井市、尼崎市に約五十機。解除は午前一時。

七月二十日（金）
七月二十一日（土）
警報なし。

七月二十二日（日）晴。夜、警戒警報発令。直ちに会社へ急行。夜空は、満月皎々として月青し。昼をあざむく程明るい夜空だった。

七月二十三日（月）晴。警報なし。

七月二十四日（火）晴。朝五時に早くも警戒警報、六時頃に空襲警報発令。八時半迄に、小型機（P51）並びに艦上機が来襲。伊丹付近を機銃掃射。九時前に大型機五十機から百機の大編隊が現れ、大阪の中央部並びに西北に投弾。十四時ごろまで続き、やっと解除になる。何と空襲時間は七時間、今までの最高記録だ。

七月二十五日（水）朝六時半から空襲警報発令。十時頃まで続く。

七月二十六日（木）午前零時から一時まで警戒警報が続く。

七月二十七日（金）警報なし。

七月二十八日（土）晴。朝より空襲。夜十一時過ぎ又もや空襲。翌二十九日午前一時半に解除。

七月二十九日（日）むし暑い一日だった。夜、警戒警報発令は二回ある。

七月三十日（月）今日も、むし暑く汗が出通しだ。朝五時半まえより空襲警報。伊丹方面で機銃掃射の音が、ものすごく、はげしく鳴り響いていた。正午すぎ会社の上空で爆音がしたかと思うと機銃掃射音がし、煙硝の臭いがする程、近かった。解除になったり、発令されたり、一日中爆音がしていた。

七月三十一日（火）晴。警報なし。

八月一日（水）晴。夜半に二回、空襲警報発令される。

八月二日（木）晴。
八月三日（金）晴。
八月四日（土）晴。
警報なし。気味が悪い程、静かだ。

警報なし。気味が悪い程、静かだ。

八月五日夜、九時半警報発令。一旦解除になって、翌六日午前一時十九分、空襲警報発令と同時に、西宮付近にて焼夷弾及び爆弾投下による火の手があがる。火焔もうもうと、もの凄く、あの憎いB29が焼夷弾を、雨霰と落下させる。又、布施市及び築港南部にも投弾するやパッと火の手があがる。二時間後解除。

八月六日（月）警報なし。

八月七目（火）晴。朝、九時二十分空襲警報発令されるが、やがて解除になる。

八月八日（水）晴。大詔奉戴日（毎月八日）である。敵は益々、頻襲を加えつつある。大本営発表によれば、一昨日広島に少数機来襲し新型爆弾を投下。被害は大であると発表される。敵機から散布したビラによれば、三国～豊中間を爆撃すると書いてあったと友人が話をしていた。

八月九日（木）晴。警報なし。

八月十日（金）晴。ソ連が日本帝国に対し宣戦布告致せり。早やソ連の少数機は、北満・北鮮に来襲。又一部兵力は北満国境より侵出し来る。

八月十一日（土）晴。八月十二日（日）晴。警報なし。

八月十三日夜、十時、十一時、翌十四日零時五十分の三回、警戒警報発令。尼崎より東北進し京都に向かった。新型爆弾の威力大のため、あわてて防空壕へ飛び込む。

八月十四日（火）九時すぎ空襲警報発令。正午前解除。

八月十五日（水）晴。朝、ラジオを通じ、本日正午に重大発表の放送があると知らされ、噂、取々にて昼の発表までの時間が待ち遠しい。十一時五十分、全員集合のベルが鳴り、第三工場に集まる。遂に歴史的な昭和二十年八月十五日十二時になる。天皇陛下より終戦詔書下される。あれ程、必勝を誓って頑張って来たのに敗戦とは。今日の日本晴れも、空一面に暗雲が閉ざしているようで気分は晴れない。

八月十六日(木)晴後夕立。……以降、路往く人は皆んな、頭をうつむかせ何かを考えながら歩んでいる。もちろん私もその一人だ。これから先どうなるのだろうと考える反面、灯火管制もない、空襲もない、いつ応召されるかの不安感もない。閉めつけられた緊張感より、やっと解放されたのだ。少しずつ明るい平和がやって来た実感が湧いてくる。決して離してはならない平和の御旗、国民皆んなが守らねばならない。子子孫孫に至るまで世界平和が持続することを願って止まない。

信仰と繁栄

N・Hさん　74歳
摂津市一津屋

前夜からのラジオ放送は、米機による大阪市内爆撃の模様を報じていた。翌朝のラジオによると西区は全滅とのことである。私は夜勤を終えて帰宅すると、主家のことが気になり、早速自転車で出かけた。吹田市の西の端にある榎阪町から大阪の西区迄は自転車で約五十分の道のりである。私が丁稚時代から約二十年間住み馴れた西区一帯は全く灰燼に帰し、想い出のあの街、あの四ツ辻もまるっきり見当がつき難く、一面の焼野原と化し、まだあちこち燻っている所さえある。

ようように花の井橋畔の主家のあった辺を探し当ててみると、汚れ果てた主人夫妻が、折りしも焼跡のわが家の瓦礫を掘り返している。床下に埋めて置いた愛蔵品を探しているとのこと。主人は非常な仏教信仰家で、当時、越前永平寺第六十八世管長泰彗昭禅師に約十年前より心随され、その方の墨蹟を数多愛蔵され、心の拠とされていた。

当時、乏しかった食糧のうちから、私が母に頼んで持参した重詰のおにぎりとお煮〆を差し出すと、主人夫妻は落涙された。中之島の中央公会堂に避難しているが、故郷奥州白河へ疎開するので、その準備のため、一日手伝ってくれと頼まれたが、私の勤めている軍需工場では、休暇などとても許可にならない逼迫した状勢だったので、残念ながら大恩ある主人のご期待にとうとう添うことができなかった。

その後、白河に着かれたことや出征中の一人息子が戦死したこと、主人も亡くなられたこと、等々の悲報に次々接した。あとに残された奥様、お嫁さん、一人の孫さんの消息も私には知る術もなく今日に至っている。

信仰に篤いお方の将来は、きっと幸福に満ちるであろうと信じていた私には、戦争ほど悲惨なことはないと、つくづく思っている。その上、丁稚時代から苦楽を共にした同輩、先輩、後輩等が今は悉く故人となってしまい、自分ひとりが生き長らえて、どうにか暮らさせて頂いている有難さ、千万無量である。世界中の政治家、統率者、実力者等々に私は訴えたい。

自分の名誉のため、自分の党のため等々ははかないものであることを認識されたい。

何よりも崇高であることは、世界中の人類の平和のために尽すことであることと肝に銘じて頂きたい。

神様が、仏様が、大宇宙が、あなたを見守っていられる。

思い出は哀し

B・Tさん　72歳
摂津市正雀

お父さん早よかえっといで
山でけん〳〵鳴いていよ

幼子三人が戸外で手をつないで歌っている。「おーい」と夫は手を振りながら満面笑顔で急ぎ足で帰って来る。幸せな我家であった。

サイパン玉砕、敗戦の色いよいよ濃い八月二十四日、夫は沖縄へ出征した。五才、四才、二才、七十五日の愛し児を残して……。

「沖縄は本土攻撃の足場として狙われる」と、又「訳の分からぬ子等が毎夕父の帰りを待ちわびている姿を想えばたまらぬ」「自分のことは早く忘れさせてくれ」と生還を期せぬ覚悟を示し、私も「ぜひ命を大切に無事に還れ」と口まで出掛かったのを押え「卑怯なことはせぬように」と言い、夫は深くうなずいた。心にもない言葉を今でも後悔している。昭和二十年、敵機来襲激しくなる。

三月十三日大阪大空襲。真紅に燃える空を睨み、留守中子一人も欠かさず立派に育てて見せると誓い、しかと抱き締める。夜毎の空襲に、くたくたの子を一人一人抱え壕に入れる。時には怪鳥のような敵機が頭上に迫った。日に二度、時には三度、子はこわがり、むづかった。

比島奪回され、沖縄攻撃熾烈となる。なまじ夫の居所を知る故に一人心痛む。長女入学。この日に米軍が沖縄本島へ上陸した。激戦の最中、父は子の入学を知るや否や？想いは如何許りだったろうか？翻る日章旗を涙で見上げた。

痲疹猖獗（ましんしょうけつ）を極む。子等皆感染する。四十度を越す熱に呻吟（しんぎん）する。私等に親はすでに無く、使用人も去り、頼む人も時節柄来てくれず、ひとり戦地の夫を案じ、子等の病を憂え、寝もやらぬ幾日、五月十二日早朝、警報にうたた寝の夢覚めて、ふと傍の子を見れば「あー」と一声忽ち顔面蒼白息絶えた。生後十ヵ月。「あーちゃん」とだけ言えた子、物言えぬ故、静かに寝ていた子、苦しかったろうに、淋しかったろうに、母の目覚を待ってひっそりと逝った吾子よ、許しておくれ。子を惜しみ、夫を案じ泣く日々であった。

「お父様の身代わりですよ」と慰めて下さった。だが私は己れを責める。六月、沖縄玉砕する。昼夜の別なく小型機来襲、爆弾投下する。子の骨を腰に逃げまどう。

八月十五日終戦。引揚げ始まる。夫の安否を尋ね歩く。今日は〳〵と待ちこがれる。ある時、満員の復員列車を見送りうらやましくて泣く。よく停電した。闇の中で子等と歌う。

〝お母様泣かずにねんねいたしましょう
明日の朝は父様の　帰るお舟を待ちましょう

等、悲しいにつけ淋しいにつけ歌う。

二十二年十月戦死公報来る。噂に沖縄敗戦直後麻文仁の海に夫らしい人が自ら命を断ったと聞く。「生きて虜囚の恥めを受けず」だったのか……。

二十三年農地解放により財の大半を失う。物価高騰・食糧不足。馴れぬ手に鍬を持ち、ミシンを踏む。加えて度々の台風の来襲、古い我家は修理に追われ、苦しい竹の子生活、口惜しい事が度々あった。だが子等はバイト等で大学を卒業。会社員として精進している。私は今も亡き父子の齢を数え涙する事もある。

十才の時の戦争体験談

N・Kさん　48歳
摂津市千里丘

私は小学校三年生のとき、愛媛県宇和島に住んでいた。戦争がそれほどひどくない時など、和霊神社の森を子供達は、「和霊様」と言って呼び親しんでいた。家の前には大きな川があり、潮の満ち引きがあり、山手にはみかん畑がある。のんびりした農家のある所だった。小学校は海岸通りにあって海辺に近い住吉小学校といった。子供達は学校から帰ると、友達をさそい和霊様にある銅像の馬にのって遊んでいた。年に何回か闘牛があり、よく見に行った。

秋のおまつりにはみこしが出て、浅瀬の川の中を走りまわり、みこしどうしがはり合いをし、黒い大きな牛鬼が出る。大人の男性三十人ぐらいが中に入って担ぎ、家を一軒一軒回り、「ボアー、ボアー」と音を出しながら首を二階の窓から突っ込み、部屋をのぞく。赤い牛鬼は小さく、子供達が三十人ぐらい入って、ブーブーと音を出しながら、平家の玄関からのぞいて通る。鹿の子おどりも出て、とても楽しく、暮らしていた。

終戦になる一年前、戦争もだんだんひどくなってきた。朝、学校へ行く途中、警戒警報が鳴る。するといつもきまって低学年、四年生まではすぐ家に帰り、五、六年生は、学校を守るためそのまま残った。いま思うと、小さな子供達がどうして、大きな学校を守ることができるのか考えてしまう。途中で帰った子供達は一つの家に集まり、自分達の勉強をしていた。こういう状態が、たびたびあった。そのうち、昼となく、夜となくB29が飛んで来るようになった。そのため、子供と老人は、家にいると危いと言うことになり、山のみかん畑の下に横穴を掘ることになった。多くの人達、男女が、毎日、せっせと穴を掘った。数日がたち横穴はできた。コの字形に作られた。三百人以上入ることができる大きな横穴だった。横穴の中は、両横に寝台を作り、そこで、子供と老人は寝起きをすることになった。家では若い男と女が住んで家を守り、空襲警報が鳴るとあわてて横穴へ逃げて来るような生活がつづいた。

私の家は、川の土手にあり、土手に沿って柳の木が植えてあった。農家の人達は一段さがった所に集まって住んでいた。私は、一人っ子なのでいつも友人の家、近所の家に遊びに行っていた。ある日、急に警戒警報がなり、つづいて空襲警報に変わった。私は友達の家にいたので早く横穴へ行こうとした。友達はいち早く横穴の方へ走っていた。どうしたことか私は台所の方へ行って外へ出ようとしていた。そのとき、急に、ドシンという音が聞こえ、

建物が揺れて、風が、さあっと吹いてきた。あとは土けむり。家のカベが落ち、台所の天井が落ちてきてもう外に出られない。どうしょうと思っているとき、何かの中に、すっぽり入ってしまった。横に倒れてしまいどうすることもできず、もがいているだけ。そのうち、頭上の柱が落ちて来て首が動かなくなった。ただ足だけをバタバタしながら、なんとかしてこの場から出ようともがいていたが、なぜか、ぬるぬるとしてすべり、思うように動けず、モンペも、靴も、ビショビショになり、半ば泣きながらもがくだけだった。しばらくすると、あたりも静かになり、土けむりだけが舞っていた。遠くの方で、おとなの人達が、ワイワイ、騒いでいる。中の一人が、大声を出し、「誰かいるのか……」、と言いながら近づいて来た。

私は、誰かに知らせて早く出してもらうため、力いっぱい大きな声を出した。男の人がガレキの山を払いのけながら、飛んで来た頭の上の柱をのけ、ひっぱり出してくれた。「あっ助かったぁー」と思った。あたりを見ればもう、めちゃくちゃになっている。形が全部変わってしまった。足もとに目をやると、大きなカメが、転がっていた。私が入っていたのは、このカメの中だった。飲み水を入れるカメ。でも、どうしてこんなカメの中に入ったのか不思議？このカメのおかげで命が救われた。男の人は、「ケガはないなぁー、よかった、よかった……」と言いながら、また走って行った。私は家に向かった。

家には、父と母がいた。帰ってみると父が家の中から出て来た。顔は土ぼこりがべっとりついていて、かのこをかぶったようにみえた。母が見えないので裏にまわってみた。私は母の顔をみてびっくりした。自分の首の痛みなどわすれ母にかけよった。母の顔がまっ赤だった。赤い布をかけたようだ。目も耳も鼻も口もみえない。血が流れている。「大丈夫」と言うと、反対に怒鳴りかえしてきた。「どうしてここにいるのか。横穴にいなければならないではないか」と。私はあわてて横穴へ走った。そして母のけがことを言った。みんなが走って母の許へ行き、病院へつれて行ってくれた。

しばらくして母は横穴へ来た。話によると、風がファッと顔をなぜて通ったようだったが、血がふき出しているのも気がつかないほど痛いと言うことは感じなかったらしい。目の上を三針縫い、顔にガラスがいっぱいササッていた。これを取ってもらい、首から上を、目と、鼻と、口を出しただけで、グルグル巻きにしていた。

父は、家の中を片付けていた。日もしだいに暮れかけている。家の中も、メチャクチャになり、何一つとして形のある物はない。土とほこりの山になっている。ある家の人で、どうしても、

横穴へ行きたくないと言って、いつも家の中にいた若夫婦と生まれて八ヵ月ぐらいの赤ちゃんがいた。運悪く、爆弾は、その若夫婦の家に落ちた。みるかげもなく、みんなバラバになっている。大きな穴がぽっかりあいていた。赤ちゃんが、溝の中に、スッポリ、かわいいベビー服を着て、お人形のようにねむっていた。夫婦の姿はなかった。母と私は、ガレキと土の塊まりの中を探ってみた。とても気持が悪かった。怖かった。土のいやな匂いがする。父が「何か手にさわった」と言って、土の中から黒い塊りを持って来た。明るい所で見た。私はびっくり、こしがぬけんばかりに驚いた。「首だ、誰の首だろう」髪の毛がさかだち、目は大きく見ひらき、土でまっ黒になっている。父は置く所がないので、しかたなく、柳の木に置き、手を合わせていた。あつい時期だったので、ハエが、みるまにとんできた。血のにおいにつられて……。家の中からは、ドンドンいろいろな物が掘り出された。

つぎつぎに人の首が出る。二つも、三つも、そして白いワイシャツが肩がちぎれて。両腕がぶらさがっていたり、手首だけ、足だけ……。その他ぞうり、くつ、ゲタなど、たくさん出てきた。首が、三つもあったが、その中の二つは若夫婦のものであった。少し前までお話しをした人なのに……。「なんて、おそろしいことが」出てきたものを柳の木の根元にならべた。両腕は、柳の木の枝に引っかけてあった。置く所がなく、仕方なくそうしたのだろう。

一夜があけた。すると、大きなトラックがゴウゴウと音をたてながらやって来た。そして、バラバラになっている死体を無造作にトラックの中に放りこむ。荷台の中は、死人でいっぱい。こぼれんばかりに、つみあげられていた。私は見ていた。なぜか、なんの感情も湧くこともなく。ただ茫然と見ていた。市内には、このトラックが何台も、何台も走って行く。話にきけば、いろいろな人が、また病院の看護婦さんたちが、ふとんをかぶり、山手の方へ逃げていたが、ふとんに火がつき燃えて、もがきながら亡くなった。どこへ逃げても火の手が追いかけて来る。物が倒れる。ガラスがとけて流れて来る。人と人がぶつかり合い、踏みつけられて倒れる。逃げる人の頭に焼夷弾が落ちる。焼け死んだ人で数えきれない。宇和島市内は、ガレキの山と死体の山で、焼野原になってしまった。

その後からも、毎日のように空襲があり、その度に爆弾や、焼夷弾が空から降ってきた。横穴の上のみかん畑にも、一トン爆弾が三つも落ちて、大きな穴が出来た。横穴に入っている時、爆弾の落ちた音を聞いた。頭の上で地響きがして、ズシン、ズシンとにぶい音。耳が裂けんばかり。頭を踏みつけ

られるような感じがした。でも横穴は無事だった。

私の家は爆風でやられ、住むことができず、終戦までに三度も家を変わったが、そのたびに焼かれてしまった。焼けて骨だけになった家の柱には焼夷弾が何本もひっかかっていた。みんな不発弾だった。こう言うことが長くつづくと、人間は、臆病になるのか、神経質になるのか、車が通っている音を聞いても、ビクビクし、いつも、耳をさかだてて、すぐにでも逃げることができるように身構えているのだ。そして、「爆音、爆音」と言いながら横穴へ走りこむ。学校も何カ月も休みになった。米軍も頭の良い攻め方をし、人間が逃げないように宇和島を中心に、囲りから攻めて来る。中心地に住んでいて、家の床下に防空壕を作り、入っていた人達はみんな亡くなった。私達は、山に作った大きな横穴に入っていたおかげで助かった。とても、恐ろしいことであった。悲しいことであった。

どの人達も、一日も早く、戦争が終わることを望んでいた。それから天皇陛下のお言葉が流れ、長かった戦争も、やっと終わった。

大人達は、食糧をもとめて、買出しに走り、焼けた跡片付けに一生懸命励み、バラック建てがめだち、人間としてやっと生きて行くことができ、今日に至っている。小学校三年生のときの、このおそろしい戦争体験は、私が生きているかぎり、頭から離れることはないであろう。また、二度と戦争を起こすようなことは避けなければならない。国のためにも、家族のためにも、そして、世界のためにも……。

平和を！

I・Mさん　41歳
摂津市浜町

「早うよ家（うち）に入りっ！　爆弾落されるよっ！」と言う、ご近所のおばさんの声が―。

戦争のことは、実感としてありませんが、ただこの言葉だけが―。

その当時、私は、香川県三豊郡大野原町にいました。幼かった私ですが、今でも鮮明な記憶として残っています。

ご近所の庭で遊んでいた時、低空で飛んで来る飛行機を〝大きな飛行機だなあー〟って見上げて喜んでいると、おばさんが、「早よう家に入りっ！爆弾が落されるよっ！」と叫んで、私を抱きかかえ家へ走り込みました。

これは、終戦後の出来事のはずですが、日々の生活の中に戦争の恐怖が去らぬまま強く残っていたのだと思います。

ところで、私は数年前の夏に、観光先の一カ所として広島の地を訪れました。

原爆ドームは、本などで見たことはあったものの、目の当りにした時には、一瞬釘付けになりました。

壁が焼けただれて落ち、鉄の骨組みは、むき出し、曲がっている……。

すさまじいばかりの惨劇だった……と物語っていました。胸がジーンとして見上げるドームがかすんで見え、〝ピカドン〟〝広い焼け野原〟〝人間が枯木の山となった〟頭の中には、いつか読んだ本の一部が浮かんできて物見遊山でこの広島の地を訪れたことを後悔しました。

後悔しながら、心の中で謝りながら、千羽鶴などで平和の願いが込められている碑を拝し、次に原爆資料館へ行きました。

資料館には、原爆の熱線でアメのように変形した一升瓶、お皿、ガラス類、ぼろ〳〵に焼けた多くの衣類、そして惨劇を伝える八時十五分で止まった時計……など。

焼けた学生服には、白い名札が残っていました。その名札は、日本中に、いいえ世界中の人々に「平和」を強く訴えているように見え、強烈に私の胸に残りました。

私は、多くの原爆の資料を見ているうちに胸が一杯になり、息が詰まるようで涙が出てきて仕方なく、しっかり見ておかなくては、見なければと、気を強く持つように頭張りましたが、とうとう館内を回り切れずに外へ出てしまいました。（再度、この原爆資料館を訪れる機会があっても、私は全ての資料をしっかりと見る勇気がなく、悲しみと恐しさでまた途中で出てしまうでしょう）

特に、血気の盛んな若者たちが、この広島の地を是非訪れ、原爆の恐ろし

さを胸の中に〝ズシーン〟と残し、若いエネルギーを「平和」のために使うことに向けて欲しいと切望します。

平和への願い、核兵器廃絶の願いは、誰の心の中にもあると思います。

平和は、私たちの日常生活の井戸端会議の中にもあるのです。みんなが小さな〳〵力を出し合い、手をつなぎ協力してしっかりと考えて、この地球を守っていかなければならないと思います。

草木が緑々と育ち
　新鮮な空地が満ちあふれ
子供らの楽しくはしゃぐ声や姿が
お年よりに、幸せ一杯の笑みが浮かび
若者のエネルギーが平和の素となり
一人一人が考え、
取り組んでいかなければならない
　この地球の平和を！

心に平和の砦を築こう

―母から聞いた戦争、そして平和の尊さ―

D・Kさん　40歳
摂津市千里丘東

中国残留日本人孤児……、私はこの言葉を耳にするたびに心が痛みます。戦後四十年たち戦後は終ったといわれる反面、中国で取り残された孤児たち、そしてわが子を中国に置いて帰ってこなければならなかった親たちにとっては、戦争は終わることなく続いていたのです。

心の痛みをひきずり続けるためには、あまりにも四十年の歳月は永すぎたのではないでしょうか。戦争がいかに多くの人々を不幸にし、大切な生命を奪ったのかを忘れてはならないと思うのです。

私は、昭和十九年に大阪市東区で生まれました。両親は、大ぜいの人を使って船場で商売をしておりました。当時わが家は大手前の大阪府庁のすぐ近くにあり、幸福な生活が続いていたのです。私が生まれた昭和十九年以後空襲がはげしくなり、B29が編隊を組んで飛んで来て、日夜サイレンの音が鳴ると、家の下の防空壕の中に逃げたそうです。夜は灯火管制（電灯に黒い布をかぶせて外から見えないようにしたもの）で、「いつサイレンが鳴るかもしれない」と、夜もゆっくり眠ることもできなかったのです。

私の母は現在七十七才になりますが、戦争の記憶は今もって鮮明に覚えており、今回ひとつひとつを確認するように当時の様子を語ってくれたのです。

昭和二十年、戦争は終局に向かって、戦火が一段とはげしくなりました。大阪府庁の屋上に焼夷弾が投下されて燃えはじめ、三越周辺は一面火の海と化し、家のすぐ近くにあった三和銀行の地下防空壕の中に逃げこんだ人は全員助からずに、死体が折り重なって山のようになっていました。道行く人々も直撃弾を受けて、バタバタと目の前で死んでいきました。母は子供五人を連れて逃げまどい、生き地獄さながらの姿を一生涯忘れる事はできないと言っています。

空襲のあった翌朝、広い大阪城公園には、家を焼かれた人々が避難していて、数えきれないほどの列であったといいます。毛布や布団をかぶって続々とやって来ました。わが家も当然丸焼けです。疎開するために荷造りを完了してあった百二十個の荷物は全部焼かれてしまいました。

当時、両親は鳥取に松根油（石油に変る油）の工場を持っていましたので、そこに疎開しました。見知らぬ土地で、十才の子を頭に五人の子供をかかえて、母の苦労は言葉ではいい現わせません。（父はその頃大阪に残っていました）

鳥取では雪は軒先まで降りつづきました。わらぐつにマントといった姿で、物資はすべてが配給制で、受け取りに行くにも猛吹雪で顔にきつくあたり、強風で田んぼに飛ばされることもたびたびでした。慣れぬ雪国での生活、とりわけ天候不順のため、私とすぐ上の姉とが急性肺炎にかかり生死をさまよい、三日三晩、一睡もせずに母は看病してくれました。知らない土地で、母はどんなにか心細かったでしょう。

母が言うには、私が五才になったばかりの頃、私は時々たずねてくる父親を「知らない人」といって泣いたそうです。母が疎開先で一番苦労したのは食糧です。何もかもが配給の時代ですから、お腹いっぱいにはなりません。育ち盛りの子供に少しでもたくさん食べさせてやりたいと、川原を掘りおこしてイモを作り、稲の実る前にイナゴを取り、焼いて食べさせたり、山へ薪を取りに行ったり、わらぞうりを作って子供達にはかせました。物質的に豊かな現在からはおよそ想像もつかない苦労をしていたのです。疎開先で苦労していた母の年令と、現在の私の年令が同じなのです。母のように忍耐強く、強固な意志は私にはとてもありません。

戦後もようやく落着きをとりもどし、昭和二十四年に大阪へ帰って来ました。日本は敗戦のショックから、人々は生きる目標を失っていた時代です。その中で、私の両親はひとつの目標を持ったのです。両親の時代に起こった戦争というもの、こんな恐ろしい、醜い、勝者も敗者もない、無益なものを再び繰り返してはならないと誓ったのです。自分達にはそれを止めるだけの知識も知恵も考える自由さえもなかったのです。一人ひとりの大人がもっとしっかりさえしていれば、もしかすれば戦争は防ぐこともできたのではないかとの思いであったのです。「これからは決して無知であってはならない、子供をきちんと教育しよう」と決心したのです。とりわけ父は教育熱心でした。しつけの面でも大変きびしい人でした。文学書や伝記を好んで私達に読ませました。子供を立派に育てて社会に送り出すことが、自分達に残された使命との思いが私達にも伝わってきました。

その甲斐あって、長兄と次兄は天王寺高校から国公立大学へと進学し、姉も天王寺高校から貿易会社へと進むことができました。どんなにつらいことでも、決してくじけることのない強いものを、私たち兄弟姉妹は両親から受けたように思います。母はいつも口ぐせのように言います。「地位もない財産もない親だが、教育という心の財産を五人の子供達に残してやれた」といいます。今にして思えば、両親は私たちにかけがえのない最高の財産を残し

てくれたように思います。私はすばらしい両親に育てられたことを誇りに思います。

戦争のない平和な毎日が続くことを願いながら、かつて日本も戦争という不幸な時代があった事を、語り伝えていかなければならないと思います。ある識者は「民衆同士の自発的意志の高まりによる文化交流こそ、不信を信頼に、反目を理解に変え、この世界から戦争という名の怪物を駆逐し、真の永続的な平和達成を可能にすると思う」と述べています。

人類が生き残っていくためには、一人ひとりが心の中に平和の砦を築いていく以外にないと思います。